

# 「水田中心史観批判」の功罪

A Critical Reconsideration of the Criticism on the Historical Perspective of Japanese History Centered on Rice Cultivation Culture

安藤広道

ANDO Hiromichi

- ①問題の所在
- ②「水田中心史観批判」の展開
- ③「水田中心史観批判」の問題点①
- ④「水田中心史観批判」の問題点②
- ⑤「水田中心史観批判」から学ぶこと
- ⑥結語

## 〔論文要旨〕

「水田中心史観批判」は、過去四半世紀における日本史学のひとつのトレンドであった。それは、文化人類学、日本民俗学の問題提起に始まり日本文献史学、考古学へと拡がった、水田稲作中心の歴史や文化の解釈を批判し、畑作を含む他の生業を視野に入れた多面的な歴史の構築を目指す動きである。その論点は多様であるが、一方で日本文化を複数の文化の複合体とし、水田中心の価値体系の確立を律令期以降の国家権力との関係で理解しようとする傾向が強く認められる。そして考古学の縄文文化、弥生文化の研究成果も、その動向に深く関わってきた。

しかし、そこで描かれた複数の文化の対立や複合の歴史は、位相の異なる文化概念の混同のうえに構築されたものであり、その土台としての役割を担ってきた縄文文化や弥生文化の農耕をめぐる研究成果も、必ずしも信頼できる資料に基づくものではなかった。文化概念の整理と、農耕関係資料の徹底した資料批判を進めた結果、「水田中心史観批判」が構築してきた歴史は、抜本的な見直しが必要であることが明らかになった。

「水田中心史観批判」は、批判的姿勢と視点の多様化が、多面的で厚みのある歴史の構築を可能とし、併せて研究対象資料と分析方法の幅の拡充につながることを示してきた。一方で、文化の概念から個々の観察事実に至る理論に対する議論が充分でなく、「水田中心史観」に対する批判の意識が強すぎたこともあって、研究成果を批判的・内省的に見直す姿勢が弱くなってしまっていた。そのため、視点の多様化の有効性が生かされず、複数の学問分野のもたれ合いのなかで、問題ある歴史が構築されることになったのである。

今後は、こうした「水田中心史観批判」の功罪を踏まえ、相互批判と内省を徹底し、より多くの事象を説明し得る広い視野に基づく理論の構築と表裏一体となった歴史研究を進めていく必要がある。

【キーワード】 水田中心史観、縄文文化、弥生文化、批判的姿勢、理論

## ①……………問題の所在

過去四半世紀の日本史学の研究において、所謂「水田中心史観」に対する批判がひとつのトレンドとなっていたことは疑いない。ここでは、1970年前後から活発になった、「水田中心史観」に対する批判的姿勢を前面に押し出した研究を、便宜的に「水田中心史観批判」と呼んでおく。それは、日本史、日本文化論、日本民族（俗）論などにみられた水田稲作を重視する分析視点や解釈に批判の眼を向け、他の生業を議論に組み込もうとする研究姿勢とまとめることができる。

もちろん、水田稲作以外の生業や、「稲作民」「稲作文化」以外の「集団」「文化」の研究自体は、「水田中心史観」論者として批判されてきた柳田國男も行っていたし、「日本文化」の複合性についての議論も、文化人類学を中心に戦後間もない時期から始まっていた。1970年前後は、こうした先駆的な研究を土台として、まず文化人類学と日本民俗学において水田稲作中心の歴史や「文化」の解釈に対する問題提起が活発化した時期に当たる。この動きは、その後、文献史学や考古学にも広がっていき、それとともに、研究の内容や枠組みも、丹念な資料収集に基づく個別具体的な研究から、東アジア全体を視野に入れた大きな議論まで実に多様なものとなっていった。近年では、初期の「水田中心史観批判」の批判にまで論点が広がっているようであり、それぞれの「水田中心史観」の捉え方や批判の論点、よって立つ理論、描き出す歴史像はますます幅広いものとなっている。そもそも「水田中心史観批判」は、歴史事象の一面的評価に対する批判としてスタートしたわけであるから、ポスト・モダンの思潮と呼応して、多面的・多角的な「歴史」の構築を志向するようになるのは、ある意味で必然的な展開だったと言ってもいい。

そうした点からすると、ここで「水田中心史観批判」を一括して議論の対象にすることは是非が問われることになるかも知れない。確かに「水田中心史観批判」的研究の全てを一つの色で表現することは困難である。しかしながら、筆者は、「水田中心史観批判」的研究の多様な展開とは裏腹に、その多くが、弥生文化以降に定着した水田稲作技術や「稲作文化」と、縄文文化以来の畑作を含む多様な生業やそれらに基づく「(畑作)文化」を対立的構図で捉え、水田稲作中心の価値体系の形成あるいは実際に水田稲作が生業の中心となる現象を、律令期以降の国家権力との関係で理解する、という共通したパラダイム（以下これを「基本パラダイム」と呼ぶ）に収斂する傾向を見せている点に注目しなければならないと思っている。もちろん、こうした「基本パラダイム」をめぐる議論も一様ではなく、すでにこの点に対する批判もみられるが、ここでは、依然「水田中心史観批判」に広く根付いているように見える、この「基本パラダイム」を議論の中心に据えたいうえで、大きく二つの観点から「水田中心史観批判」の問題点を指摘したいと思う。ひとつはそこで用いられてきたさまざまな「文化」の概念をめぐる問題であり、もうひとつは「水田中心史観批判」と考古学の研究成果の関係である。

後述するように、「水田中心史観批判」では、文化人類学や日本民俗学を中心に、「稲作文化」に対する「畑作文化」や「照葉樹林文化」「ナラ林文化」という複数の「文化」を設定することで、「日本文化」の多様性、多元性を主張するという批判の枠組みが用いられてきた。そして、そこに縄文文化と弥生文化という考古学的文化の対立的構図が重ね合されることで、「基本パラダイム」につ

ながら「文化」を主体とする歴史が構築されてきたのである。しかし、「稲作文化」や「畑作文化」という言葉は、そもそも個々の地域的な「文化」を、農耕のあり方に基づいて評価する際に用いる、時空間や系統を捨象した概念のはずである。また、「照葉樹林文化」「ナラ林文化」は、東アジアに展開するさまざまな農耕技術をはじめとする「文化要素」の分布と、樹林帯という生態系との関係を理解するための仮説的な枠組みと考えたほうがいい。これに対し、縄文文化、弥生文化という「考古学的文化」は、我々の「歴史観」に基づいて編年体系上で設定される型式のまとまりである。こうした、それぞれ位相の異なるさまざまな「文化」概念を重ね合わせて、「文化」の多様性や「文化」の対立、競合、複合といった現象を語るができるのか、筆者は大きな疑問を感じている。

一方、「水田中心史観批判」の展開において、時代を問わず生業の実態解明に不可欠となる考古学研究が、そこでの議論と深く関わることになるのは、当然のなりゆきであった。特に農耕の始まりに関しては、考古学の研究成果が決め手となるだけに、考古学に向けられる関心と期待は否が応にも高まっていくことになる。そうした状況のなかで、考古学サイドでも、水田稲作に比重を置いてきた先史・古代の農耕研究の再検討を目指す、「水田中心史観批判」に呼応した動きが広がっていくことになるのである。これらの研究では、遺構覆土の水洗選別やプラント・オパール分析などの新しい分析方法が積極的に導入され、縄文文化についてはイネを含む穀類生産技術の確認とその系譜の追求、弥生文化に関しては食糧源としての水田稲作の比重の下方修正と畠作やその他の生業の評価、という方向に研究が進んでいくことになった。そして、その成果が、「水田中心史観批判」、「基本パラダイム」を支える土台としての役割を果たすことになるのである。

しかしながら、新たな分析方法が有効なデータを提示できる程度にまで洗練されるには、方法をめぐる批判的検討と試行錯誤を繰り返すための、ある程度の時間を要するのが普通である。これまで筆者は、こうした観点から「水田中心史観批判」的視点に基づく分析の問題点を一貫して指摘し続けてきたが、そこで明らかになってきたのは、方法論的議論が充分とは言えない分析事例があまりにも多く、依然として「水田中心史観批判」、「基本パラダイム」を支えることなど到底できない状態に留まっているということであった。おそらく考古学以外の「水田中心史観批判」論者は驚くだろうが、縄文文化の農耕技術をめぐっては、現在までのところクリやマメ類、イヌビエなどのいくつかの植物に栽培されていた可能性が認められるだけで、弥生文化以降の主要な穀類であるイネ、アワ、キビ、ムギ類などの存在を示す確実な証拠は見つかっていないのである。

「水田中心史観批判」が、近年までの弥生文化研究に大きな影響を及ぼし、弥生文化観、弥生時代観の形成に深く関わってきたことは疑いのない事実である。それとともに、日本列島の先史時代研究が、「水田中心史観批判」の「基本パラダイム」を支える土台になってきたことも間違いない。とすれば、弥生文化研究を含む考古学の研究と、「水田中心史観批判」の「基本パラダイム」の形成との関係を整理し、そのうえで「水田中心史観批判」の功罪、つまり継承・発展させていく諸点と止揚すべき問題点を明確にすることは、当基幹研究ブランチのサブタイトルである「弥生時代像の再構築」を進めるにあたって不可欠な作業になると考える。これが本稿の目的である。

## ②……………「水田中心史観批判」の展開

### (1)「水田中心史観」の形成と弥生文化研究の関係

ここでは、上記の問題設定に基づき、まず「水田中心史観批判」の展開過程を辿りつつ、「基本パラダイム」が形成された経緯をまとめてみたい。

「水田中心史観」とされる歴史観の形成をめぐるのは、これまで、柳田國男を中心とする日本民俗学が、豊富な儀礼や伝承の研究の成果として日本の常民文化の根幹が稲作文化にあると評価してきた点や、日本文献史学が、コメや水田をめぐる豊富な文献史料に基づき、戦前は皇国史観、戦後は生産力の発展を軸とした、国家中心の歴史を描きだしてきた点に注目する傾向が強かった。もちろん筆者も、こうした点が「水田中心史観」形成の主たる要因であったことを否定するつもりはないが、一方で、弥生文化を水田稲作、生産経済、農耕社会の開始期と位置づけた考古学の研究成果が、「水田中心史観」を支える土台としての意味をもち続けてきたことを見逃すべきではないと考えている。

日本考古学において、弥生文化と稲作技術の関係が明確に指摘されたのは、1932年の山内清男の「日本遠古之文化」によってであった〔山内 1932b～e〕。この指摘のインパクトは大きく、当時弥生文化研究の牽引者のひとりであった森本六爾によって、すぐさま弥生文化を「原始的農業社会に生まれた文化」とする評価がまとめられ〔森本 1933〕、矢継ぎ早に喧伝されることになった〔森本編 1933, 1934〕。こうした弥生文化を水田稲作主体の農耕文化とする理解は、弥生文化を律令国家や記紀神話の礎となった大陸伝来の「文化」と位置づける研究や〔小林 1938〕、ちょうどこのころから水面下で着実な拡がりを見せていた、生産経済の開始の歴史的意義を重視するマルクス主義的研究の進展とも呼応して〔三沢 1936〕、急速に、かつ確固たるものとして定着することになったのである。また、1937年の奈良県唐古遺跡の発掘調査によって、多量の農具が出土したことも〔末永ほか 1943〕、水田稲作技術と弥生文化の密接な関係を具体的に示すものとなった。当時、大山柏をはじめとして、縄文文化における農耕の存在を否定すべきではないとの慎重論もなかったわけではないが〔大山 1934：78頁〕、縄文文化の遺跡から農耕の存在を示す確実な証拠が見つからないなかで、以上の動向に掻き消されていくことになった。

戦後も長らく、弥生文化を大陸伝来の文化とする評価と、マルクス主義に基づく生産経済の開始期としての評価は継続するが、遺跡の発掘調査及び編年研究をはじめとする個別具体的な考古学資料の研究にエネルギーが注がれるようになったこと、そしてその成果として晩期縄文文化と初期弥生文化の関係や、弥生文化を構成する大陸系要素の様相が明確になっていったことで、両者の関係は必ずしも対立的なものではなくなった。とはいえ、学問の統制から解放されたことで歴史学全体がマルクス主義に染まるなか、下部構造の規定性を重視した全体論的な弥生文化の評価、例えば近藤義郎の「弥生文化を特徴づけるさまざまな要素はすべて農耕生活と関係し、それに支えられて存在し、また変化発達した」、「弥生文化の特質を根底において規定している稲作農業」〔近藤 1962：158頁〕との表現に代表されるように、弥生文化の諸様相を、水田稲作を基盤とする生産様式との

関係において理解しようとする流れが一気に加速したことを見逃してはならないだろう。

さて、以上の弥生文化研究の展開において注意しておかなければならないのは、戦前・戦後を通じて、首尾一貫「生産経済（農耕）の始まり」を「水田稲作の始まり」と捉えてきたことである。こうして、日本文献史学や日本民俗学において展開していた「水田中心史観」的研究の土台を支える、「歴史」の起点としての弥生文化の評価が定着し、水田稲作を基軸とする「日本史」が一貫性、全体性をもつことになったわけである。

なお、戦前の弥生文化を大陸伝来の「文化」とする理解は、先述のとおり戦後の考古学資料やその調査・研究の蓄積のなかで、そのままのかたちで継承されることはなかった。しかし、その発想は、弥生文化が水田稲作技術を含む大陸の文化要素の伝来によって北部九州地域で形成され、次第に東の地域へと広がっていくといったイメージのなかに生き続け、弥生文化を北部九州地域あるいは西日本を本源（本質）とする「新来」の「文化」とみなす傾向、縄文文化と弥生文化の連続性よりも異質性を強調し、両者を対立的に捉える傾向を生み出すことになった。そして、そうした傾向と、文化人類学を中心とした「水田中心史観批判」のなかに顕著にみられる、類型化された複数の「文化」の伝播・複合・並存・対立等によって歴史を描く視点（「典型的文化動態論」）との親和性が、その後の「水田中心史観批判」の展開において大きな意味をもつことになるのである。

## (2) 「典型的文化動態論」の展開

以上のように、「水田中心史観」的研究の展開において、「歴史」の起点としての弥生文化の評価の確立は、きわめて重要な意味をもっていたと考えられる。であれば逆に、弥生文化及びそれ以前に水田稲作以外の農耕技術が存在していたことになると、その枠組みに少なからぬ変更が必要になるはずである。日本列島先史時代における水田稲作以外の農耕技術の存在をめぐる研究は、そうした意味を含めて、「水田中心史観」を批判する視点の起点、そして原動力になり得るものであった。以下にみるように「水田中心史観批判」において畑作をめぐる議論が多くなっているのも、それが「水田中心史観」への批判、新たな「歴史観」の構築に結びつきやすかったことが関係しているものと考えられる。

先述のように、縄文文化に農耕技術が存在する可能性は、戦前から指摘されていた。戦後も、1960年代までに一部の考古学者が打製石斧等の農具の可能性のある道具の発達や、中国の新石器文化との比較などを通じて縄文文化の農耕技術の存在を積極的に評価していたが〔賀川1966、藤森1970など〕、残念ながら希望的観測に基づく杜撰な議論が多く、また遺跡の調査の進展によっても確たる証拠が発見されないなか、弥生文化研究者からの厳しい批判に晒されていた〔佐原1968〕。

こうした状況下で、縄文文化における農耕技術の有無に関し、「水田中心史観批判」に連なる火種を胚胎していたのは、考古学ではなく文化人類学（民族学）であった。

戦後間もない1948年に開催された「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」という討論会において、岡正雄は、豊富な東アジアの民族誌の知識に基づく比較民族学的方法によって、「日本の民族文化」が5つの「種族文化層」によって構成されていることを主張し、後年、それらに修正を加えて、①母系的・秘密結社の・芋栽培＝狩猟民文化、②母系的・陸稲栽培＝狩猟民文化、③父系的・「ハラ」氏族的・畑作＝狩猟民文化、④男性的・年齢階梯的・水稲栽培＝漁撈民文化、⑤父権的・「ウジ」

氏族的・支配者文化と整理した。そして、このうち①②が、弥生文化と関係する④及び同時期の③の伝播よりも前、つまり縄文時代に日本列島に定着していたとの見解を示したのである〔岡 1958〕。

この岡の議論のように、特定の「文化要素」のまとまりによって典型的に設定した「文化」を主体とし、それぞれの伝播・複合・共存・対立・競合などによって歴史事象を理解しようとする視点を、ここでは広義の文化史的視点と区別するために「典型的文化動態論」と呼んでおくと、岡によって明確に打ち出された「典型的文化動態論」的「日本文化論」が、以後の文化人類学的視点からの「水田中心史観批判」の動向を強く規定することになるのである。

1970年代から現在に至るまで「典型的文化動態論」的視点による「水田中心史観批判」を強力に推進している佐々木高明は、岡の主張に大きな刺激を受けたことを一貫して語ってきた〔佐々木 2009 など〕。佐々木は、日本を含む東アジアの焼畑研究を精力的に進め、その成果を、中尾佐助の提唱した「照葉樹林文化論」〔中尾 1966〕をベースにした学際的な共同研究の成果のなかに位置づけようと試みてきた〔上山編 1969〕。そして、1971年の『稲作以前』を皮切りに、縄文時代後晩期の西日本一帯に「照葉樹林文化」の「焼畑農耕文化」が定着していたことを、強く主張するようになったのである。

「照葉樹林文化」は、雲南から長江の南の地域を経て日本列島南半に広がる照葉樹林帯（後に「東亜半月弧」と呼ばれる〔上山他 1976〕）に、根菜や穀類（アワ・キビ・ヒエ・ダイズ・アズキ・（コメ）等）を生産する焼畑や、根茎類・堅果類の水晒し技術が展開していることから想定された、地理学的な「農耕文化」である〔中尾 1966, 上山編 1969〕。そこに、学際的な研究成果として、ネバネバの食物、茶、絹、漆、麴、竹細工、高床建物、山上世界の観念、儀礼的狩猟、天岩戸型神話、洪水神話などのさまざまな側面に及ぶ多様な「文化要素」が共通してみられることが加えられ、こうした要素が組み合わさる「文化」と考えられるようになった。「照葉樹林文化」は、中尾の提唱時点から時間軸を考慮している点にも特徴があり、何段階かの修正を経て、現在では①プレ農耕段階、②雑穀中心の焼畑段階、③稲作卓越の段階といった変遷が想定されるようになっている。

『稲作以前』において佐々木は、日本に見られる焼畑技術が、輪作体系にイネを含まない「雑穀・根菜型」であり、東アジアでは稲作を含む体系から「雑穀・根菜型」への移行が認められないことを根拠に、それが弥生文化の水田稲作より古い農耕技術であることを指摘した。つまり、日本の焼畑技術は、縄文時代に定着した「照葉樹林焼畑農耕文化」に起源を求めることができ、「日本文化」の基層に、弥生時代の「稲作文化」とは異質の「焼畑農耕文化」が存在することを主張したのである。

ただ、初期の佐々木の議論を含めた「照葉樹林文化論」では、弥生時代の「稲作文化」とは異なる「農耕文化」の存在と、その後の両者の並存が論じられつつも、「焼畑農耕文化」の存在が弥生時代の「稲作文化」の展開の基盤になった点や、縄文文化と弥生文化の継続性などが強調されていることには注意しておく必要がある。つまり、この時点では、「日本文化」の起点を弥生文化とする見解に対し、それを縄文文化に遡らせることに主眼が置かれており、依然「水田中心史観」の延長線上に位置づけ得る解釈と言うこともできるからである。

ところが、1990年代以降になると、「照葉樹林文化論」の論点の中心が、「日本文化」の多元性の主張へとシフトしていくことになった。それは、『照葉樹林文化』や『稲作以前』において「シベリアン・アーク」や「ナラ林文化」と呼ばれ僅かに言及されただけだった北方系の農耕技術や「農

耕文化」の存在に光が当てられるようになり、それとともに縄文文化の主体が「ナラ林文化」であると主張され始めたことと関係する。

佐々木によると、「ナラ林文化」は、深鉢形土器、竪穴住居、イヌの飼育、魚皮の利用、加熱によるアク抜き、ブタ飼養、サケ・マス漁、多様な狩猟・漁労・採集、常島等に特徴づけられるとされ、やはりプレ農耕段階と農耕段階に区分できるという。佐々木は、縄文文化の遺跡密度が東日本に偏っている状況から縄文文化の主体を「ナラ林文化」と評価し、基本的にプレ農耕段階としながらも、水田稲作が東日本に定着する前に、常島の技術が一部定着していた可能性を指摘した〔佐々木 1986・1993a〕。

この北方系畠作技術を含む「ナラ林文化」を縄文文化の主体とみなす発想が加わったことが、結果として「照葉樹林文化」における「焼畑文化」と弥生時代以降の「稲作文化」の関係の評価にも変化をもたらすことになった。以後、佐々木の議論において、「焼畑文化」を「稲作文化」の基盤とする従前の主張は弱くなり、一方で、「ナラ林文化」と「照葉樹林文化」を、「稲作文化」とは異なり、かつそれに先行する「非稲作農耕文化」としてまとめて議論することが多くなっていった。つまり、議論の中心がそれら複数の「文化」の共存や対立に移っていくことになったのである。

さらに、佐々木は、熱帯ジャポニカ、踏耕、掘棒を特徴とする「南島農耕文化」を弥生時代の「稲作文化」に先行する「文化」に加え〔佐々木 2003〕、国家権力によって表層的に「日本文化」全体を覆うようになった「稲作文化」に対し、それに先行するとともに長らく共存・対立していた多様な「非稲作農耕文化」の存在をいっそう強調するようになった。こうして、「稲作文化」だけではない「日本文化」の多様性、及び「稲作文化」以前の「日本文化」の基層としての「非稲作農耕文化」の存在が、「類型的文化動態論」として強く主張されるようになったのである〔佐々木 2009〕。

### (3) 日本民俗学における「山民」研究に基づく「水田中心史観批判」

さて、上記の文化人類学的研究とともに、縄文文化に遡る農耕技術の追求とそれに基づく「水田中心史観批判」の展開において、大きな役割を果たしたのが日本民俗学における「山民」研究であった。

よく知られたことではあるが、水田稲作を行う「平地民」とは異なる、山地に居住してきた集団（山民、山人等）の研究に先鞭をつけたのは、「水田中心史観」の中心人物として批判されてきた柳田國男である〔柳田 1913・1917〕。柳田は、日本の国家形成の主体である「天神」を表象とする民族（常民）に対し、日本列島の先住民である「国神」を表象とする民族の存在を想定し、「天神」の渡来とその版図拡大にあたり、「国神」の大半は「同化」「討死」「併合」「征服」されたが、一部が水田稲作を受容せずに山地に生活の場を移して「山人」になったとした。戦前の皇国史観に基づく歴史研究においても、形質人類学や考古学、文献史学を含め「日本民族」以前の先住民への関心は高く、柳田の「山人」論もそうした研究のひとつと理解することができる。

つまり、日本民俗学では、早くから日本列島における複数の文化の存在を前提としてきたのであり、それゆえに、その後、「稲作文化」の理解に力点が置かれるようになっても、山村に古い「文化」の残影をみようとする視点自体は継続していた。そうしたなかで、「日本文化」の「稲作文化一元論」に対する批判の萌芽とともに山村に「稲作文化」とは系譜を異にする「非稲作農業を基礎とした文

化」が存在していることや〔千葉 1966:372 頁〕、「山岳民」に水田稲作を受容しなかった「畑作農民」の姿をみて、それを縄文文化の系譜と理解しようとする主張〔宮本 1965・1968〕が注目されるようになる。そしてこうした研究が、その後の日本民俗学における「水田中心史観批判」へとつながっていくのである。

学史的にみて、日本民俗学の「水田中心史観批判」の中心的な研究者と評価されているのは坪井洋文である。坪井は、『イモと日本人—民俗文化論の課題—』のなかで、「山民」にみられる「餅なし正月」の内容と分布を明らかにし、「稲作文化」とは「異質」な、焼畑を生活の基盤とする「畑作文化」が山地一帯に広く存在することを指摘した。そして、この「畑作文化」は、焼畑作物の儀礼から稲の儀礼への移行が全国的に認められるのに対し、その逆がないことなどから、弥生時代以降の「稲作文化」に先行する、つまり縄文文化に系譜が遡るものとされ、日本の「民俗文化」は、それぞれ異質な二つの「集団文化」の「接触による衝撃によって起きた自己認識の連続的過程」〔坪井 1979: 159 頁〕として理解できるとしたのである。

常民を研究対象とする日本民俗学では、国家の制度、支配によって与えられる知識に対する、常民が地域のなかで培ってきた知識（民俗）の存在が強調される。柳田が、当時の農民をめぐる諸問題に取り組むために、後者の解明を目指してきたのは周知の通りであるが〔柳田 1935 など〕、坪井の議論を含めた日本民俗学の初期の「水田中心史観批判」では、同じ構造を踏襲するなかで、「稲作文化」を前者、「畑作文化」を後者とするようなバリエーションの変換が行われることになった。それが、「稲作民的農耕文化支配の視点からみた稲作文化単一論などは、支配者の側にのみ立った幻想」〔坪井 1982: 167 頁〕との、「基本パラダイム」に通じる主張を生みだしていったことを見逃してはならない。

さて、上記のような坪井の主張は、弥生時代以降の「稲作文化」と縄文時代に遡る「畑作文化」をそれぞれ独自の体系をもつ「文化」の単位として歴史の主体に据えている点で「典型的文化動態論」的な色彩が強いものと評価できる。また、「稲作文化」を支配者層の「文化」と位置づけている点にも、岡らの主張との近接性をみることができるといえる。さらに坪井の「畑作文化」は、イモを中心とする焼畑を基盤としている点で、佐々木の「雑穀・根菜型」焼畑の「照葉樹林文化」と重なり、「畑作文化」が先行し、「稲作文化」の伝播とともに両者が並存するとの理解も一致していた。佐々木が努めて学際的な研究の推進を心がけていたこともあって、日本民俗学の「山民」研究は、すぐに佐々木らの「照葉樹林文化・ナラ林文化」論と同調することになり、さらに民俗学はもちろん、植物学、動物学、遺伝学をはじめとするさまざまな学問分野の研究者を集めたシンポジウムや論集により、縄文文化の農耕技術の存在に結びつく可能性のあるデータが集められたことも手伝って、佐々木や坪井らによる、縄文文化と弥生文化の農耕技術を「典型的文化動態論」的に捉える理解が、その後の文献史学や考古学の研究にも少なからぬ影響を及ぼすようになっていくのである。

#### (4) 日本文献史学における農本主義批判と畠作研究の展開

以上のような文化人類学や日本民俗学における動向に対し、日本文献史学では、これらとは異なる契機によって「水田中心史観」に対する批判が始まったようである。

日本文献史学における「水田中心史観」に対する見直しは、アナール派を起点とする「社会史」



の影響によるものと言われている。そうした社会史的な観点から、それまでの「水田中心史観」を含む「日本文化論」のさまざまな「常識」的見解に対し、強い批判を展開したのが網野善彦である。網野の議論は実に多方面に及んでいるが、「水田中心史観批判」の議論としては、主に中世を対象に文献史料等に見え隠れする「非農業生産」「非農業民」の存在に光を当て、中世までの所謂「百姓」のなかにも「かなりの数の非水田的・非農業的な生業を主として営む人々がいたこと」〔網野1993:14頁〕を明らかにし、弥生時代から江戸時代まで一貫して自給自足的な農村が中心だったという従来の理解の虚構性を指摘した点などが挙げられる。

一方、「水田中心史観」の背景となる水田稲作中心の価値体系の形成をめぐるのは、律令国家がイネを収奪の中心とする農本主義的制度を基盤としたことが、以後の支配者側の価値観に決定的な影響を与えたとの見解を強調した。しかしそれはあくまでも支配者側の価値観であって、未開な社会を中国の法体系と仏教の受容によって強引に統合した「早熟」な国家に過ぎない律令国家は、その諸制度が社会の実態とは著しくかけ離れていたがゆえに早々に実体を失うことになったとしている。また、中世においても、「非農業民」の多様な活動の証拠を列挙しつつ、荘園公領制を水田稲作中心の自給自足的な農業社会とみなすことは全くの的外れであるとの理解を提示した〔網野1986・1993〕。

網野は、「水田中心史観批判」の大勢とは一線を画し、一貫して非農業民にこだわっているが、これは、律令国家以降の為政者側の農本主義と、庶民の生活の実態の乖離を明らかにする点に論点を置いていたためと考えられる。しかし、筆者は、それだけでなく、網野が、戦前から続く生産諸力の発展という図式とは異なる観点からの歴史叙述を目指そうとしていたことが深く関わっていたと評価している。いずれにしても、網野の幅広い視野からの議論によって、日本文献史学においても、水田中心の価値体系の形成を、律令国家以降の為政者側の政策との関係で理解しようとする方向性が固まっていくのである。

一方、網野があまり議論の対象としなかった畠作については、黒田日出男〔黒田1984〕、木村茂光〔木村1992・1996〕らが精力的に研究を進めることになった。木村は、古代、中世の畠作関係の文献史料を渉猟してそれぞれの仔細な検討を行い、支配階層による水田やイネを価値の基準とする政策とは裏腹に、古代、中世（以降も）にはさまざまな形態の畠作が行われていたこと、そしてその面積や生産物の割合も決して低いとは言えず、コメとそれ以外の穀類の価値の差もそれほど大きくなかったことなどを明らかにした。そのうえで、各時代の農業生産力や分業・流通の実態を明らかにするためには、畠作の研究が不可欠であることを強調し、それが日本の「民衆論」、「村落論」、「日本文化論」、そして「水田中心史観」の再考にもつながると主張したのである〔木村1992・1996〕。

木村を代表とする日本文献史学の畠作研究は、網野の社会史的視点とは異なり、「稲作文化」や「農業民」の側の生産力も水田稲作のみで説明することはできないという点からの「水田中心史観批判」になることが多く、また生産諸力の発達と社会の変化の関係が強調される点でも、マルクス主義的唯物史観から続く「歴史観」の延長線上に位置づけられるものである。こうした研究が、古代より前、つまり先史時代の生産諸力においても、畠作やその他の生業が重要であったとする考えに結びつきやすいのは当然で、網野の主張するコメ中心の価値体系を支配者側の論理とする見解とも絡んで、時代を遡っていけば生業及び生業の組み合わせり方の多様性が増していく、というイメージの

形成へとつながっていくことになったのである〔網野 1982・1986, 木村 1996, 伊藤 2005〕。

一方、こうしたイメージの形成においては、狩猟・採集・漁撈・畑作等の各生業の起源、そして生業の多様性の原点としての縄文文化観が、深く関わっていたことも見逃すべきではない。日本文献史学における「水田中心史観批判」では、「類型的文化動態論」や後述する考古学における「縄文農耕論」の成果を積極的に参照し、常畠や焼畑を縄文文化に遡る農耕技術と位置づけたうえで議論を展開する傾向が強くなっている〔木村 1996, 伊藤 2005〕。そこでは、弥生文化の水田稲作技術が、縄文文化以来の生業及び農耕技術の多様性をただちに解消するものではなく、複合的な生業のひとつ、つまり生産諸力全体の部分として位置付けられるとともに、古代・中世以降の畠作技術は、そうした多様な生業のなかから発達したものと理解されているのが特徴である。

### (5) 弥生文化研究における「水田中心史観批判」

さて、次に、以上のような「水田中心史観批判」の動向と並行して、考古学の弥生文化研究にどのような動きがあったのか、そしてそれらがこれまで述べてきた「水田中心史観批判」とどのように関係していたのかをまとめてみることにしよう。

1947年の静岡県登呂遺跡の発掘調査〔日本考古学協会 1949〕によって、弥生時代後期の集落とそれに伴う広大な水田址と各種農具が検出されたことは、戦前に形成されていた、生産経済、水田稲作、そして歴史の起点としての弥生文化の評価をさらに固めることにつながった。登呂遺跡の調査成果、及びその研究は、戦前の学問統制からの解放を謳歌する象徴的な舞台になっただけでなく、そこからイメージされることになった豊かな農耕社会の姿が、敗戦直後の辛苦を極めた時期にあつて、日本の豊かさを象徴するものとして、広く国民に受け止められるようになったのである。

登呂遺跡の調査以後、日本考古学協会は、弥生文化の起源と展開を明らかにするため、1951年に弥生式土器文化総合研究特別委員会を設置し、福岡県板付遺跡をはじめとする各地の弥生時代遺跡の発掘調査を実施した。その成果は『日本農耕文化の生成』〔日本考古学協会編 1961〕にまとめられ、北部九州地域で成立した水田稲作を基軸とする弥生文化が、各地に広がっていくことが改めて強調されることになった。

1968年には、その中心人物であった杉原荘介が、登呂遺跡の調査成果をもとに水田の全体像の復元を行い、生産可能なコメの量の試算を行った〔杉原 1968〕。杉原はこの論文で、単位面積当たりのコメの生産量を、現在よりかなり少なく見積もって1升／1坪としても、登呂集落の人々が1日3合のコメを食するのに十分な量を生産でき、さらに余剰分を交換財として使用することも可能であったとの評価に達している。学術誌における成果発表ではなかったものの、この論文によって、弥生文化が水田稲作を基盤としていたことが具体的な数値をもって示された意義は大きく、「水田中心史観」的研究を支える土台としての弥生文化の評価はますます強固になっていったのである。

1968年を前後する時期と言え、先述のとおり文化人類学や日本民俗学において、「水田中心史観批判」が展開し始めていたところである。1971年には佐々木の『稲作以前』が発表されているが、自説が「異端の学説」として扱われていたとする佐々木の回顧の背景には、以上のような弥生文化研究の動向があったことになる。

こうした弥生文化の評価に対し、水田の生産量の再検討によって一石を投じたのは乙益重隆で

あった。乙益は、1978年の「弥生時代農業の生産力と労働力」[乙益1978]において、杉原のコメの生産量の基準とした1升/1坪という数値に疑問を投げかけ、沢田吾一による『延喜式』などに基づく古代水田の生産量の研究をよりどころとして、杉原の基準値が弥生時代にはあり得ないほど高い数値であることを指摘した。そして、登呂遺跡の水田では、仮に奈良時代の中田相当の生産量があった場合でも、1人1日3合食したとして44～48人分、下田では32～36人分に留まるとし、コメ以外の食糧の存在を無視するべきではないとの結論を導いたのである。この乙益の研究のインパクトは非常に大きく、以後の弥生文化の水田稲作の議論において、弥生文化のコメ消費量は「少なかった」という言説が一般化していく起点となった。

3年後の1981年には、寺沢薫、寺沢知子が、「弥生時代植物質食糧の基礎的研究」と題する、考古学における「水田中心史観批判」の画期となる総合的な論文を発表した[寺沢・寺沢1981]。寺沢らは、まず弥生文化の遺跡から出土した食用植物遺体の全国的な集成を行い、コメ以外にも多様な食用植物が出土していることを明らかにした。そして、乙益と同様の方法を前期と中期の遺跡にも適用し、自身の実験や単位面積当たりの生産量に関する民族誌データを加味したうえで、「1人1日あたりのコメ摂取可能量は、後期で約2合程度、中期では(中略)1合程度、前期では1/10となりほとんどコメの摂取といえるような状態ではない」と結論づけた。さらに畠作に適した地形に立地する遺跡の検討なども加え、弥生文化の人々の暮らしが、自然の植物資源の採集や畠作に大きなウェイトをおくものであったことを強調したのである。

この寺沢らの多角的・総合的な視点からの研究によって、戦前以来、弥生文化の諸様相を水田稲作中心の生産様式との関係において理解してきた、考古学における「水田中心史観」の再考を促す機運が、一気に高まったことは疑いない。1980年代以降、住居址を中心とした遺構覆土の水洗選別法(フローテーション、スクリーニング)が広く行われるようになったのも、寺沢らの「水田中心史観批判」の影響と考えていいだろう。水洗選別法による炭化種子類の分析では、その初期の事例である神奈川県横浜市道高速2号線No.6遺跡において、住居址覆土からオオムギを中心とする穀類が多数検出されたことも、この方法の有効性を広く知らしめる契機となった[横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団1984:55-67頁]。その後の分析では、コメを主体とする事例が増加することになるが、一方でオオムギやコムギ、アワなどが多数含まれる事例も少なからず蓄積されるようになり、その都度、弥生文化における畠作の存在への注意が喚起されることになったのである。

また、このころから、文化人類学、日本民俗学、日本文献史学の「水田中心史観批判」の研究成果を積極的に参照した論文も増え始める[寺沢1986a・b、甲元1986など]。そうしたこともあって、1990年代以降の弥生文化の生業をめぐる議論では、食糧源としての水田稲作の比重を過大評価すべきではないとの見解が一般化していくことになったのである[広瀬1997、甲元2000、黒尾・高瀬2003]。

なお、弥生文化の畠作技術をめぐっては、水田に不適な場所に多数の集落遺跡が形成される地域の存在が、古くから指摘されていたことも忘れてはならないだろう。長野県の伊那谷[松島1964]や大分県大野川上流域[玉永1992]などが代表的な地域となるが、都出比呂志は、寺沢らの研究や水洗選別法の成果などを踏まえ、こうした地域を「畑作卓越型」と呼んで水田稲作が中心となる地域と区別することを提唱している[都出1984:129・130頁]。

以上のように、乙益、寺沢らの研究以降、弥生文化におけるコメの生産量・消費量を少なく見積もり、畠作を中心とするその他の生業の比重を高く想定する見解（以下、「弥生畠作論」と呼ぶ）が、弥生文化研究において確固たる位置を占めるようになった。そしてそれは、諸分野の「水田中心史観批判」を参照しながら進められるとともに、それらの議論の土台として位置づけられることになるのである。

## (6)「縄文農耕論」の新展開

「弥生畠作論」とともに、諸分野の「水田中心史観批判」の動向と深く関係していたのは「縄文農耕論」である。それはむしろ、「弥生畠作論」以上に、「水田中心史観批判」と密接な関係をもってきたと言ってもいい。

縄文文化における農耕技術の存在をめぐる議論は、先述のとおり戦前に遡り、戦後も幾人かの研究者がその可能性を追求し続けていた。しかし、遺跡の発掘調査が進展しても縄文文化の農耕技術の存在を示す確たる証拠が見つからないなかで、縄文文化を獲得経済、弥生文化を生産経済とする評価の壁をなかなか突き崩すことができずにいたのである。1971年の『稲作以前』以降、「照葉樹林文化論」に基づいて縄文文化における焼畑技術の存在を主張していた佐々木高明も、この時点では、「縄文農耕論」を主張する考古学者たちの不確かな証拠に頼るほかなかったわけである。

しかし、縄文文化の農耕技術の存否をめぐる状況は、1970年代後半以降、少しずつ変化し始める。例えば、福井県鳥浜貝塚遺跡からヒョウタンやマメ類、ゴボウ等が検出されたことは〔西田1977など〕、縄文文化の栽培植物の存在に多くの人々の目を引きつけることになり、中部地方を中心にエゴマ・シソの存在が確認されたことも重要な成果となった〔松谷1982〕。また、1980年代後半からは、水洗選別法によって、北海道ハマナス野遺跡をはじめとする北海道のいくつかの遺跡から馴化した可能性のあるイヌビエ（縄文ヒエ）の出土が報じられるようになり〔吉崎1991〕、1990年代になると、青森県富ノ沢遺跡や風張遺跡などで、縄文ヒエ、コメ、アワ、キビなどが検出されたほか〔吉崎1992・1995、吉崎ほか1992、三浦1992〕、青森県風張遺跡から出土したコメの年代が測定され、縄文文化のもつと結論づけられるという成果もあった〔D'andrea1995〕。そして、ほぼ同じころに岡山県南溝手遺跡出土の縄文時代後期の土器にコメの圧痕が発見されたことによって〔高橋1992〕、縄文文化の農耕をめぐる議論は、一気に肯定的な方向へと舵を切ることになったのである。こうした動向と並行してプラント・オパール分析も各地で盛んに行われ、縄文時代中期あるいはそれ以前からイネが存在していたことを主張する研究者も現れるようになった〔高橋1994〕。

こうした「縄文農耕論」の転換を受けて、広瀬和雄は、縄文文化の稲作技術の存在を積極的に評価し、それを「畑稲作」と呼んで弥生文化の水田稲作とは別の技術系統とする見解を発表した。そして、寺沢らの成果を踏まえて、弥生時代になっても水田稲作で生産されるコメの食糧全体における比重は決して高くなかったとしつつも、水田稲作における労働の集約性がその後の社会の複雑化の起点となったとする独特の議論を展開した〔広瀬1997〕。

また、宮本一夫は、縄文文化における栽培植物の証拠を集成し、栽培植物が縄文時代早期に遡ること、コメやアワなどの穀類も縄文時代中期末には定着していた可能性があることを指摘した。そして、東アジアの農耕技術の展開過程を踏まえつつ、縄文時代から弥生時代の農耕技術の展開を、

①園耕段階（縄文時代早期～）：ヒョウタン、シソ、エゴマ、クリ、ニワトコなど、②成熟園耕段階（縄文時代中期末～）コメ、アワ、ハトムギ、ゴボウなど、③初期農耕段階（弥生時代早期～）水田稲作、の3段階に整理している〔宮本 2000・2005・2009〕。

宮本は、縄文文化のコメやアワが、朝鮮半島を経由してもたらされた可能性が高いことを重視し、佐々木が主張する照葉樹林文化の焼畑技術の伝来は否定した。しかし、宮本をはじめとする多くの考古学者が、縄文文化に遡る栽培植物、そしてコメやアワなどの穀類の存在を確実視し、縄文文化の農耕技術について積極的に評価したことは、「弥生島作論」の展開と絡み、これまで述べてきた諸分野における「水田中心史観批判」に、確固たる議論の土台を提供するものになっていったのである。

### (7)「水田中心史観批判」の「基本パラダイム」の形成

中・近世山村史の米家泰作は、文化人類学、日本民俗学、日本文献史学にみられる「山村に伝来した生業の起源を縄文期に求める想定」を「縄文の系譜」と呼んでいる〔米家 2002：25 頁〕。米家自身は、「縄文の系譜」論を必ずしも全面的に肯定しているわけではないが、一方で、「縄文の系譜」論は、上記の 1990 年代からの「縄文農耕論」の新展開を受けて、「次第に説得力を強めつつある」、「一定の支持を得つつある」と述べている。事実、近年刊行された概説書等では、「縄文の系譜」のさまざまな技術、特に縄文文化における畑作技術の存在がすでに定説になっているかのような記述が目立っており〔伊藤 2005, 原田 2006 など〕、「水田中心史観批判」と「縄文農耕論」の関係の根深さをうかがうことができる。

これまで述べてきたように、文化人類学、日本民俗学の「類型論的文化動態論」の「水田中心史観批判」では、考古学における「縄文農耕論」の新展開以前から、水田稲作技術に対して畑作技術を、「稲作文化」に対して「畑作文化」を対置させるとともに、前者よりも後者を古く位置づけようとしてきた。そこに、「水田中心史観」の起点としての弥生文化の系譜とは異なる、縄文文化の系譜、つまりもうひとつの「農耕文化」「畑作文化」、あるいは焼畑や常島の技術を想定し、なおかつそれを「稲作文化」に先行させることで、それが「稲作文化」以前の「日本文化」の基層であること、及び「日本文化」が複数の「文化」によって構成されていることを示す意図があったのは間違いない。

ただ、そこにおいて、何故、多様な「縄文の系譜」のなかで畑作に議論が集中したのかについては、敢えて海の生業を強調した網野のような立場もある以上、改めて問い直してみる必要があるだろう。もちろん、そこに、それまでの文化人類学や民俗学のフィールドワークの成果に基づく帰納的な帰結という側面がなかったわけではない。しかし、その一方で、考古学的な成果の裏付けのない段階での縄文文化の畑作技術をめぐる議論が、「水田中心史観」を批判するための仮説的な解釈の枠組みの提示から始まったことは間違いないため、やはりそこには、その他の生業ではなく畑作が選ばれた理由があったとみるのが妥当である。

筆者は、そこに、「水田中心史観」が生産経済の開始期を歴史の起点と評価してきたことが深い影を落としていていると考えている。すなわち、「水田中心史観」の根本にある、水田稲作を中心とする生産諸力の発展と社会の変化の構造的な理解を覆すには、その理論全体を否定し、生産諸力の発展

とは異なる観点からの多面的・多角的な「歴史」の構築を目指す方向と、生産諸力を軸とする共通の構造をもつ歴史観に則りつつも生産諸力のなかの水田稲作の中心性を否定するというふたつの方向がある。それは、先に指摘したとおり、日本文献史学における、網野の社会史的な視点による議論と、畠作研究の議論の違いに見て取ることができるものであった。これに対し、「水田中心史観批判」の主潮を形成していた文化人類学や日本民俗学における議論は、生産諸力の発展を軸としたマルクス主義的な理解に対する否定的意見が見られ、また、「稲作文化」とは系譜を異にする「文化」の「歴史」を構築しようとしてきた点では前者的であるように映るものの、その一方で、常に畑作にこだわってきた点では非常に後者的色合いの強い議論であった。つまり、本来的な批判の枠組みとしては畑作以外の生業を軸とした議論が可能であったにも関わらず、意図してかせざるかは別にして、「農耕の開始」「生産経済の開始」という土俵から離れようとはしなかったわけである。私はそこに、それらの事象を「日本歴史」「日本文化」の起点として評価してきた、「水田中心史観」の残影をみることができるのではないかと考えている。

いずれにせよ、これまでの「水田中心史観批判」では、いくつかの例外を除いて、水田稲作技術や「稲作文化」とは系譜の異なる畑作技術、「畑作文化」の存在に議論が集中することが多くっており、同時にそれらの畑作技術、「畑作文化」が、水田稲作技術、「稲作文化」に先行することを論証しようとするか、前提としてきたことは動かしがたい事実である。そこに以上のような「水田中心史観」の残影をみるかどうかは別にしても、そうであったがゆえに、考古学における「縄文農耕論」が注目を集め、その成果が非常に大きな意味をもつようになったことは間違いないだろう。

さて、日本民俗学の「水田中心史観批判」において、常民研究の構造をベースに「稲作文化」を支配者層と結びつける傾向が強くなっていったことは先述のとおりである。また、日本文献史学でも、網野が、農本主義的な歴史観の虚構性を指摘し、水田稲作中心の価値体系の形成に律令国家以降の支配者の農本主義的政策が深く関わっていたことを強調していた。「基本パラダイム」にみられる、水田稲作を国家形成と結びつけ、水田稲作を中心とする価値体系の形成を国家の政策、権力と関連させて理解する傾向は、こうしたなかで明確になっていったのである。

そうした理解が、水田稲作以外の生業を、国家形成≒水田稲作以前、つまり「縄文の系譜」とする見方と同調しやすいことは明らかである。その結果、畑作を縄文文化の表象とするイメージが固まっていき、畑作技術を含む多様な生業が組み合わせる縄文文化に、水田稲作技術をもつ弥生文化が重なり、律令期の農本主義政策によって水田稲作中心の価値体系が植え付けられ、やがて水田稲作を基盤とする国家、「文化」が形成されるという「歴史観」が形成されていったのである。

考古学における縄文文化、弥生文化をめぐる議論も、以上のような縄文文化と弥生文化の対立的な理解、あるいは「稲作文化」を国家形成と結びつけ「畑作文化」を非国家的なものとするイメージの形成と深く関わっていた。もちろん、考古学の「水田中心史観批判」には、ここで「弥生畠作論」として、弥生文化の水田稲作の比重の見直しと畠作の積極的評価を進める動きがあり、それは一見、上記の「歴史観」には結びつかないように映るかも知れない。しかし、「弥生畠作論」は、基本的に弥生文化の多様性をめぐる議論と結びついており、畠作を含む縄文文化的な側面をもつ弥生文化と、水田稲作を軸とした国家形成へと向かう弥生文化といった、「基本パラダイム」を支える、複数の「文化」の対立的枠組みを内包し得る議論になっていることを見逃してはならない。

さらに、先述のように、戦後の弥生文化研究には、大陸起源の弥生文化が東漸して「日本文化」の基盤を形成するという、戦前の発想から脱却しきれていない側面があり〔石川2008〕、そのために縄文文化と弥生文化を異質な「文化」として捉える傾向があった。考古学研究に色濃く残る、こうした縄文文化と弥生文化、あるいは縄文文化的様相と弥生文化的様相の対立的な捉え方は、それらの関係の構造的な類似によって、それぞれを「典型的文化動態論」における「照葉樹林文化」「ナラ林文化」「非稲作農耕文化」「畑作文化」「稲作文化」などの用語に変換し得る窓口を開くことになる。そして、それによって、考古学における縄文文化、弥生文化の研究が、「典型的文化動態論」的な「水田中心史観批判」に組み込まれていく道筋が用意されることになった。

こうして、実証的なイメージをもつ考古学の「縄文農耕論」「弥生畠作論」を土台として、縄文文化と弥生文化の対立的理解や、これまで述べてきた諸学問分野の研究成果が同調し合い、その総合的な結論として、「水田中心史観批判」の「基本パラダイム」が定説化されていったのである。

### ③……………「水田中心史観批判」の問題点①

#### —さまざまな「文化」の概念をめぐる諸問題

##### (1)「生業文化類型」の概念

さて、ここからは、これまで述べてきた「水田中心史観批判」のさまざまな議論とそこで形成された「基本パラダイム」の問題点を明らかにしていきたいと思う。はじめに検討するのは、「水田中心史観批判」で用いられてきたさまざまな「文化」の概念と、それぞれの「文化」を主体とした「歴史」叙述の妥当性についてである。

「水田中心史観批判」で多用される、「稲作文化」「畑作文化」といった生業名を冠した「文化」（以下「生業文化類型」とする）をめぐるのは、すでに多くの研究者によって問題点が指摘されている。例えば、安室知は、文化人類学や日本民俗学の「水田中心史観批判」によくみられる「稲作民・畑作民・漁撈民・狩猟民・職人」という単一の生業のイメージ、あるいは「稲作(民)文化 対 畑作(民)文化」といった枠組みによる議論に対し、「各類型が独立して出発したものという前提があり、類型間の相互関連の様相が捨象されてしまっている」と批判した〔安室1997:249・250頁〕。安室は、「生計活動の実態は各種生業技術の選択的複合の上に成り立っている」とし〔同上〕、自らの議論の枠組みを「複合生業論」として、単一の生業に基づく「文化類型」ではなく、さまざまな生業の「複合」「相互関連」のあり方によって、日本の「民俗文化」の実態を理論化すべきであると主張する。これと類した「生業文化類型」の批判、あるいは生業の複合性を重視する視点については、近年の日本民俗学や日本文献史学においてすでに多くの言及があり〔野本1997、溝口2002、米家2002、伊藤2005など〕、もはや多くの研究者が認識するところになっていると言ってもよさそうである。

こうした生業の「複合」「相互関連」を追求していく視点は、「水田中心史観批判」において強調される傾向のある、技術の系統、系譜の歴史学的意義をめぐる議論に再考を促すうえでも重要である。すなわち、個々の生業の技術は、他の生業を含めた人々の諸活動全体のなかでそのあり方を大きく変えることはもちろん、仮に複数の地域に同じような技術が認められたとしても、その技術の文化的、社会的、経済的意味は、其々の地域に固有の分業を含めた労働配分、生産手段や生産物の

所有・収奪、儀礼・祭祀、世界観によって大きく異なってくるはずだからである。加えて言うなら、一つの技術系統が長期にわたり純粋なかたちで継続されることは実際には非常に稀で、就中農耕のような生産性が重視される技術では、新たな品種や、農具、施肥、畜力利用などのさまざまな技術が次々と導入されるというのが当たり前だったと考えるべきである。当然、技術の系統をめぐる議論では、そうしたさまざまな要素の導入とその歴史的意義を明らかにしていかなければならないことになる。ある技術の系統の起源を追求し続けた結果、仮に縄文文化や弥生文化、あるいは大陸の先史文化にまで到達したとしても、そのこと自体は決して珍しいことでもなければ不思議なことでもない。ある生業技術の原点がどこにあるのかという点から語り得る「歴史」の範囲は、必ずしも大きくないのである。

「生業文化類型」をめぐるのは、以上のような批判のほか、これまでの「水田中心史観批判」で用いられてきたような、ある時間的空間的範囲をもつ「文化」を指し示す用法が適切なのかという、根本的な問題にも触れておく必要があるようである。そもそも、「生業文化類型」は、ある地域的な「文化」を対象として、食糧生産のあり方や生業と価値体系との関係を明らかにしたうえで、それぞれの「文化」の性格を表現した、言わば「文化」の評価に関わる名称なのではなかろうか。つまり、「畑作文化」「稲作文化」と評価し得る「文化」は世界中にあるのであって、場合によっては、ひとつの「地域文化」が基準の選択次第で「稲作文化」と評価されたり、「畑作文化」と評価されたりすることもあり得る。また、ある地域において、灌漑技術の発達による水利用の変化や、特産物の形成、新耕地の開発などのさまざまな要因によって、「畑作文化」的な様相が急に「稲作文化」的な様相に変化することや、反対に「稲作文化」的な様相が「畑作文化」的な様相になることもごく普通に起こっていたはずである。

いずれにしても、これまでの「水田中心史観批判」のように複数の「文化」の動態をめぐる議論において、ひとつの生業が中心となる「文化」とのイメージを固定しやすく、また本来的に生業のあり方の評価に過ぎない「生業文化類型」を、「歴史」の主体とすることは控えるべきである。もちろん筆者は、「生業文化類型」が無意味であるとは言っていない。肝心なのは、「生業文化類型」の概念を正しく理解し、誤解の生じない限定されたコンテキストでの使用を心がけることなのである。

なお、「生業文化類型」ではないが、「水田中心史観批判」で多用される、「海民」「平地民」「山民」というカテゴリーにも同様の問題があると考えられる。複雑な地形からなる日本列島では、いつの時代でも、臨海地域から平野の広がる地域、山地あるいは山がちな地域まで、多様な地形的特徴をもつ地域に人々が居住してきた。そして、それぞれの地域ごとに「文化」的差異をもつ人々が長く暮らしてきたことも確かであろう。しかし、先史時代から「海民」「平地民」「山民」として区別可能な「文化」があり、それが歴史時代にも連綿と続いていたと考えていいかは別の問題である。「海民」「平地民」「山民」という区分は、日本列島の時期ごと地域ごとの「文化」の研究を進めていった結果、それぞれの「文化」的特徴や社会的まとまりが明確に認められた場合にのみ使用可能なのであり、地形的区分によってアプリアリに設定できるものではないことを忘れてはならない。

## (2)「地理学的文化類型」の概念

次に、「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」といったいわば「地理学的文化類型」とも言うべき「文



化」概念をめぐる問題点について考えてみたい。この二つの「文化」は、先述のように、樹林帯に基づく生態系と「文化要素」の組み合わせによって類型化されるとともに、それぞれの時間的変遷が考慮されている点に特徴がある。つまり、両者は、照葉樹林やナラ林という世界各地に存在する樹林帯の名称を冠しているが、実際には東アジアのそれぞれの樹林帯をベースとする時空間的範囲をもつ「文化」として捉えられている。その点で「生業文化類型」とは全く異なった「文化」の概念ということになる。

「照葉樹林文化」と「ナラ林文化」をめぐる、まず問題にしたいのは、本州島の中央付近を境界として、南を「照葉樹林文化」、北を「ナラ林文化」とするような「文化」の区分が現実的に可能なかという点である。もちろん、これまで指摘されてきたように、日本列島の東西あるいは南北で、縄文土器の型式やその他の遺物の分布が大きく二つの大別群に分かれるような様相を示す時期がないわけではない。しかし、長期に渡り一貫してそうした東西差、南北差があったわけではないし、より多くの大別群に分けられる時期もある。また、仮にそうした二つの大別群に区分できたとしても、それぞれが大陸を含めた広い範囲に及ぶ「照葉樹林文化」「ナラ林文化」の一部として評価できるかはまた別の問題となる。いずれにしても、縄文文化の様々な要素や地域的差異を十分に踏まえたうえで、縄文文化が「照葉樹林文化」と「ナラ林文化」という大陸につながる二つの「文化」に区分し得ることが論証されたことはないのであって、まずはその点をしっかり確認しておく必要がある。

そもそも「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」は、農耕技術をはじめとする多様な「文化要素」を寄せ集めたうえで想定された、最大公約数的な「文化」区分なのであり、その「典型」とされる「地域文化」以外になると、とたんに曖昧な部分が多くなる。また、広範囲に及ぶ「文化」区分であるが故に、指標とされる要素自体の変異も大きくなっており、実際にはどの要素をどう評価するかによってその範囲はいかようにでも解釈できてしまう。つまり、「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」は、あくまでも、東アジアに展開するさまざまな「文化要素」の分布と樹林帯という生態系との関係を理解するための作業仮説の域を出ていないと言わざるを得ないのである。

そうした「照葉樹林文化」「ナラ林文化」の時空間的範囲が、指標となる諸要素がまとまって移動・伝播したことを示すもの、あるいは地域集団同士の関係の粗密を反映したものではないことは明らかである。弥生文化の水田稲作技術とアワ・キビの畠作技術は、ともに朝鮮半島のナラ林帯から照葉樹林帯を経て、ほぼ同時にもたらされた可能性が高く、日本列島では照葉樹林帯からナラ林帯へと拡がっていった。その他の朝鮮半島経由の多くの要素も、基本的に複数の樹林帯をまたいで伝播している。

また、「ナラ林文化」の要素とされる畠作技術の展開をみても、弥生文化成立期前後に畝立てを伴う畠の技術が定着した後、5世紀になって新たに畠地と放牧地を切り替える技術が朝鮮半島からもたらされるなど、さまざまな技術が断続的に導入され、積み重なっていったことが明らかになっている。つまり、畠作技術と言っても、決してひとつの技術の系譜として理解できるわけではないのである。このように、諸要素の動きや定着過程は、多様かつ複雑だったのであり、少なくとも考古学的にトレースできる物質文化を見る限り、「照葉樹林文化」「ナラ林文化」は、複数の要素が組み合わさったパッケージ的な「文化」の伝播によって拡がっていったものではないと断言できる。

「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」の指標とされる諸要素のなかには、共通する自然環境のなかで多元的に発生したものもあつたはずである。また、起源地が限定される要素も、人々の交流を通じて各地に拡がっていく過程で、個々の「地域文化」の生産様式や世界観、気候、地形、動植物相などの歴史的・自然的諸条件に応じて、時に受容され、時に改変され、また時に拒絶されたりしながら、徐々にそれぞれの自然環境（樹林帯）に適合したかたちにまとまっていったのであろう。こうしたものが「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」の実態なのである。

とはいえ、筆者は、「地理学的文化類型」に関しても、その発想が無意味であるとは思っていない。むしろ、近年の農耕技術の歴史学的研究における生態学的視点の欠如という問題点を指摘してきた筆者の立場からすれば〔安藤 2006 など〕、生態学的視点と自然科学を含む学際的な研究成果を組み込んだ「地理学的文化類型」から学ぶべき点は少なくないように思える。ただ、その意味を明確にするためにも、まずは、それぞれの樹林帯と関係するようにみえる「文化要素」に対し、その展開過程をひとつひとつ明らかにしていくことが必要になってこよう。そうした基礎的な分析が未了なままでは、以上のような非常に大づかみな「文化」である「照葉樹林文化」「ナラ林文化」といった概念が、歴史研究に与することはないと断言してもいいだろう。

### (3) 「考古学的文化」の概念と縄文文化・弥生文化の枠組み

では、縄文文化、弥生文化の「文化」はどう理解すべきであろうか。実は、この点については考古学界においても十分に整理されていないように思えるため、以下少し詳しく述べることにしたい。

先史時代における時間軸、空間軸の設定が、型式による編年体系によってのみ可能となることについては論をまたないだろう〔鈴木 1988 : 52 頁〕。つまり、型式及び型式の組み合わせの最小単位を除く、いかなる時間、空間の単位も、編年体系上に配列された型式及び型式の組み合わせのグルーピングとして設定されなければならないということである。それは地域的な「考古学的文化」の設定から、縄文文化・縄文時代、弥生文化・弥生時代といった大きな枠組みの「考古学的文化」「考古学的時代」であっても変わることはない。蛇足を承知で一言加えると、その設定にあたり、「日本」や「日本列島」というアプリオリな地域区分は不要だけでなく、排除すべきものとなる。

問題は、そのグルーピングをどのように行うかであるが、その方法には大きく二つの方向性がある。ひとつは、ある「考古学的文化」の標準となる型式、型式の組み合わせを設定し、標準同士の比較に基づく標準との類似度の評価によってグルーピングしていく方法である。もうひとつは、型式及び型式の組み合わせの相互比較によって編年体系を系統的關係として整理していく方法、つまり系統の分裂や統合、別系統からの影響、系統上の急激な変化などとして表れる画期や、系統間の関係の粗密に基づいてグルーピングする方法である。

前者の方法は、その標準が代表性をもち得る（本質となり得る）程度の限られた時空間的範囲の「考古学的文化」を設定する際に有効である。また、この方法は、標準との異同をめぐる議論が中心になることもあつて、基本的に細別を志向することになる。この方法によって縄文文化や弥生文化のような広範な時空間に及ぶ「考古学的文化」を設定しようとする、各「文化」の境界が非常に曖昧になってしまうはずである。それだけでなく、標準同士の差異が大きくなるだけに、その連続性よりも、対立性や異質性が強調される傾向を生み出してしまうことも問題となる。この方法によ

て縄文文化や弥生文化を捉え直すことには、大きな問題があると言わざるを得ない。

もう一方の後者の方法であるが、型式は、生物の種とは異なり、時間軸に連鎖する型式の系統と、空間軸に連鎖する型式相互の関係性のなかで存在するという基本構造をもっている。したがって型式による編年体系は、縦（時間）軸と横（空間）軸に広がる網の目を形成することになる。「考古学的文化」の基盤となる、型式及び型式の組み合わせの系統的なまとまりは、その網の目における時間軸上の変化の度合いと空間軸上の関係の粗密を評価することで設定されるわけである。そうした画期や境界の設定は、それによって構築される「歴史」全体と相互依存的な関係にあり、「歴史観」次第で、設定される「考古学的文化」の時空間的範囲は変化することになる。

学史的にみて、縄文文化が後者の方法によって設定された「考古学的文化」であったことは間違いない [山内 1932a～d・1964a・b・1969]。それは、朝鮮半島や北東アジアの土器型式群とは一線を画し、かつ水田稲作を含む大陸系の「文化要素」の定着を契機とする弥生式土器の系統の成立（画期）以前の、縄文土器の系統 [山内 1932a: 40・41 頁] に基づいて設定された、獲得経済を特徴とする「考古学的文化」とまとめることができる。この縄文文化の設定において、土器型式の系統が重視されているのは、多くの鋭感的属性からなる土器が、細かな編年体系の構築に適しているということだけでなく、人々及び集団同士の関係性の粗密も、最も鋭敏に反映する（つまり社会的関係をも十分に射程に収められる）との理解に基づいている。

なお、以上の見解において、縄文文化と縄文時代はほぼ同義であり、縄文文化の時空間的範囲を時代名称として表現したものが縄文時代であるとみていい。「考古学的文化」と「考古学的時代」の関係についてはほかにも意見はあるが、先史時代における時空間は編年体系上で区分するのが原則であるため、「考古学的文化」と「考古学的時代」の時空間的範囲が重なること自体は、決して不思議なことでもおかしいことでもない。

一方の弥生文化をめぐるのは、戦前において弥生文化を「渡来文化」とする見解が支配的だったこともあり、必ずしも縄文文化と同様の理解が定着していたわけではなかった [黒沢 2011: 80 頁]。それは現在にも深い影を落としているが、仮に現在通説となっている弥生文化の範囲を縄文文化と同じ方法で説明しようとする、以下のようになると思われる。すなわち、弥生文化の始まりの画期は、晩期縄文文化が、朝鮮半島無文土器文化からの水田稲作技術を含むさまざまな「文化要素」の浸透によって変容し始めた時点、より具体的に言うと土器編年上で縄文土器の系統の一部に、そうした事態を反映した何らかの変化が認められた時点となる。そして、同質の変化が各地で継起的に生じることで形成された弥生式土器の縦横に連鎖する系統が、弥生文化の範囲を規定する [安藤 2007]。一方、弥生文化に後続する「考古学的文化」は前方後円墳文化であり、それは弥生文化の広い範囲に前方後円墳を共有する社会的まとまりが形成される時点、土器編年上ではそうした事態を反映した広範囲に及ぶ土器型式の影響関係の進展による地域差の縮小を画期として設定される（ただし、前方後円墳文化は、前方後円墳を表象とする社会的関係の範囲と一致するため、縄文文化や弥生文化とは質的に異なる「考古学的文化」であり、土器型式の系統よりも、社会的関係をより鋭敏に反映する古墳型式の系統を重視して設定すべきである）。

こうした弥生文化の設定において、何故朝鮮半島無文土器文化からの「文化要素」の浸透、とりわけ水田稲作技術の定着が重視されるのかということ、そこには、我々が、水田稲作技術の定着とい

イベントを、その後の「歴史」の展開上の大きな画期と評価してきたことが関係する。前方後円墳の成立にみられる広範に及ぶ社会的関係の形成を、前方後円墳文化の始まりの画期としてきたのも同様である。

さて、以上の縄文文化、弥生文化の理解の是非はともかく、近年の日本の先史考古学、特に弥生文化研究における「考古学的文化」「考古学的時代」の設定方法をめぐる議論は、残念ながら低調と言わざるを得ないようである。例えば、弥生時代の定義に関して言うと、現在、最も一般化しているのは、佐原真が1975年に提唱した「日本で食糧生産を基礎とする生活が開始された時代」であり「前方後円墳の出現をもって古墳時代へと移行した」との定義であろう〔佐原1975:114・115頁〕。また、弥生式土器についても、佐原に従い、土器の特徴によって縄文土器と弥生式土器を分類することは不可能として、縄文時代の土器を縄文土器、弥生時代の土器を弥生土器とする考え方が定着しているように思われる。

しかしながら、この佐原の弥生時代の定義は、「日本」という地域を前提としている点で、到底「考古学的文化」「考古学的時代」たり得ないものである。佐原の縄文土器と弥生土器をめぐる議論も、縄文土器に共通し弥生土器にない特徴またはその逆がない限り、土器による定義は不可能、との本質主義的な視点に基づいており〔佐原1987〕、これでは山内清男が示したような広い時空間に及ぶ縄文土器、弥生式土器の系統の理解には到達できるわけがない。こうした佐原の縄文土器、弥生土器の理解の仕方からみて、氏が弥生時代の定義に「日本」という地域区分を加えざるを得なかったのは、弥生時代を本質主義的に捉えようとしてもできなかったという事情があったからだともていざらう。

もちろん、佐原の定義に対してはすでに多くの反論があり、また近年では考古学研究の国際化が叫ばれるなか、縄文文化、弥生文化の定義や時空間的範囲を捉え直そうとする動きが活発化している。しかし、そこでの議論も、「日本」や「日本列島」という地域的枠組みを前提としていたり〔藤尾2002・2011〕、あるいは、弥生文化のある様相を「典型」(=本質)として弥生文化を捉えようとする、本質主義的な理解が目立っている〔森岡2011、松木2011など〕のが気にかかる。ア priori な地域設定に基づく時代区分の問題はもはや説明不要と思われるが、目に見える典型的な事例(「知覚できる存在」〔大塚2011:15頁〕)に基づいて「考古学的文化」を定義しようとする本質主義的な方法では、中間の様相や過渡期的様相をめぐる議論が繰り返される細別のスパイラルに陥るだけでなく、常に典型と傍流、中心と周縁という意味づけの是非が問われることになってしまい〔高瀬2004:332-341頁〕、最終的には佐原の縄文土器・弥生土器の議論と同じように、弥生文化、弥生時代の枠組みは説明不可能という結果に終わることが予見できるからである。

もちろん、現在の縄文文化・縄文時代、弥生文化・弥生時代の枠組みを全面的に肯定する必要はないし、既存の解釈の内省的検討は、考古学が学問であり続けるために取り組み続けなければならない重要な課題である。特に縄文文化や弥生文化のような広い時空間に及ぶ「考古学的文化」「考古学的時代」は、その設定の鍵となる系統や画期の評価が我々の「歴史観」に依存する、というより「歴史観」と表裏一体のものである以上、常に見直し続ける姿勢が必要である〔大塚1996、山田2005など〕。しかし、そうした場合でも、「考古学的文化」「考古学的時代」を論じる際には、まず、それが編年体系上で範囲が示される、我々の「歴史観」と結びついた理論的な存在である点を理解

すべきであることは動かない。さらに言えば、現在の縄文文化や弥生文化という言葉も、「歴史」の解釈において使用する際には、それらが上記のような「考古学的文化」であることを踏まえ、そこから逸脱しないコンテキストで用いることが必要になるのである。

#### (4)「類型的文化動態論」の限界

さて、以上のように「水田中心史観批判」で用いられてきた、さまざまな「文化」の概念について整理をしてみると、「水田中心史観批判」や「基本パラダイム」の問題の一端が明確になってくるはずである。

「生業文化類型」に基づく「歴史」叙述については、すでに多くの批判があり、もはや多言は不要であろう。ひとつ加えておくと、「生業文化類型」と深く関係してきた山村史研究では、先述の安室らの生業を複合的なものとして捉え直す視点の浸透のほかに、律令期における貢租からの逃亡〔丸山 1989〕を含めた人口移動や、中世の山岳信仰、資源開発に伴う開発〔黒田 1984〕の研究、山村の生業のあり方を商品経済の浸透などの平野を含めた全体的な経済的関係のなかで捉える研究〔米家 2002〕の進展により、山地における「非稲作文化」の様相をむしろ近世以降に明確化したものとする見解が定着しつつある点に注目したいと思っている。つまり、坪井らが主張してきた、「稲作文化」と「畑作文化」という相互に異質で系譜の異なる二つの「生業文化類型」の対立的構図では、もはやその出発点となった山間部の生業の具体相をも説明し得なくなっているのである。

考古学の研究成果に照らしても、例えば、弥生時代において「稲作文化」や「畑作文化」と評価できるような「地域文化」の一貫した系統を見出すことは困難である。「畑作文化」との関係で論じられることのある水田稲作不適地の遺跡を例にとると、確かに各地の弥生時代の初期、つまり各地の晩期縄文文化の変容当初には、そうした遺跡が比較的多く認められ、後述のようにアワ・キビが中心となる穀類構成の地域も存在する。しかし、各地の弥生文化の成立からしばらくすると、水田適地での遺跡の増加、不適地での減少とともに、コメが穀類の中心になり、アワ・キビ中心の遺跡はみられなくなる。

一方、中期後葉～終末期には、再び広範囲で水田不適地の遺跡が増加する。西日本では所謂高地性集落が地域ごとに多様な様相を見せつつ展開し、先述の長野県伊那谷や大分県大野川上流域のように、広い水田を形成し得ない地域に大規模な集落遺跡群が形成されることもある。また、そうした地域のなかには、終末期の東京都秋川流域のようにアワ・キビが比較的多く検出される地域があることも知られている。しかし、こうした遺跡や遺跡群は、鉄器の普及などによる集団関係の複雑化や地域間交流の活発化のなかで、軍事的な契機も含め水田不適地となる高所や交通ルートの要衝への集落の進出が必要になったことを示すものであって、そうした場所に居住し続けた「畑作文化」の存在を物語るものではない。もちろん、そうした水田不適地に進出することで水田以外の生業の比重が高まり、その結果、「畑作文化」と評価可能な生活がそこで営まれることはあったかも知れない。ただしそれとて、日本民俗学などで主張されてきた「稲作文化」とは異質の「畑作文化」の存在の証拠になるものではないのである。

「生業文化類型」では、山民の「畑作文化」の特徴を broad-spectrum な生業の多様な複合、「稲作文化」の特徴を、稲作に著しく収斂する mono-spectrum とし、それに関わるさまざまな「文化要素」

の組み合わせ方を踏まえて、両者を起源の異なる別の「文化」であると強調する意見もしばしば認められた〔佐々木 1993b など〕。しかし、これは、律令期以降も断続的に続いた人口の増加と、社会・経済システムの複雑化により、日本列島の環境の多様性に応じて分業的関係を伴いつつ進行した生業技術の多様化と、増大した人口を支えるための生産性の高い水田稲作に集中する農民の人口比率の拡大という状況において、人口上のマジョリティである水田稲作農民の生活のみを切り取って「稲作文化」と呼び、その他の多様な生業を「畑作文化」と呼んでいるに過ぎない。

水田稲作農民の生活に共通点が目立ち、それ以外の生業を営む人々の生活に多様性が認められるのは、ある意味当たり前のことであって、それは決して「稲作文化」と「畑作文化」の構造や質の違いなどと言えるものではない。それぞれの様相は、両者を包括する大きな枠組みの社会・経済システムの部分としてのみ、正確な理解が得られるものなのである。もちろん、水田稲作農民が多い地域に、水田稲作を基盤とする生活様式や価値の体系が形成され、その他の生業が混じり合う地域にも、それぞれ多様な生活様式、価値体系が形成されることは言うまでもない。そして、そうした地域的な「文化」に対して、我々の視点から「稲作文化」や「畑作文化」という評価を与えることはできる。しかし、それは「生業文化類型」に基づく「類型的文化動態論」で強調される、相互に異質で系譜の異なる「稲作文化」と「畑作文化」ではない。両者の対立という構図は、「日本文化」の多様性・多元性を主張するための議論の枠組み自体に内在する、個別的な現象から乖離した理念的なものと言わざるを得ないのである。

以上のような批判は、同じく「類型的文化動態論」的議論上の「文化類型」である「照葉樹林文化」「ナラ林文化」にもあてはまる。すでに論じたように、「照葉樹林文化」「ナラ林文化」は、考古学や文献史学による検証が未了な、東アジアに展開するさまざまな「文化要素」の分布と樹林帯との関係を理解するための作業仮説と見なすべきものである。そうした大づかみな「文化」を「歴史」の主体に位置づけ、仮に比喩的な表現であっても、地域的な「文化」レベルの現象である、対立・競合・複合などを論じることは相当な無理がある。当然のことながら、こうした「文化」を設定したとしても、それによって「日本文化」の多様性・多元性を論じることなど不可能である。

その意味で、佐々木ほか多くの研究者が主張する「日本文化」の多様性・多元性をめぐる議論は、看過できない誤謬（あるいは作為的な議論のすり替え）に基づいていることを指摘せざるを得なくなる。何となれば、それが「日本文化」という現在の日本国の版図に基づく枠組み内の議論であること自体が問題であるし、それ以上に、日本列島の先史時代に、「生業文化類型」や「地理学的文化類型」のような大づかみで理念的な「文化」の存在を想定したところで、それを現在の日本国の多民族性、多文化性をめぐる議論、つまりすぐれて現代的な問題である、国民国家と「地域文化」「民族文化」の多様性の問題と同じ土俵で論じることなど不可能だからである。

もはや言うまでもないのかも知れないが、これまで述べてきた問題点の根本には、本質的で固定的な複数の「文化」を設定し、それらの相互関係によって「歴史」を描こうとしてきた、「類型的文化動態論」の限界がある。現在の我々に求められているのは、全体と部分の弁証法的関係に基づいた、より具体的な「文化動態」の把握なのであり、我々の進むべき道は、もはや「類型的文化動態論」の延長線上にはないと断言してもいいだろう。もちろんそれは、単に「畑作文化」や「稲作文化」、「照葉樹林文化」「ナラ林文化」などによって構築されてきた「歴史」だけの問題ではない。

前に述べたとおり、考古学や日本文献史学を含めた「水田中心史観批判」には、縄文文化や弥生文化を本質的な「文化」として扱ったり、「類型的文化動態論」的に理解する傾向があり、それが、ここで問題にしている「基本パラダイム」につながっていることを忘れてはならない。そうした、これまでの研究成果や歴史叙述に内在する部分も含めて、我々には、「水田中心史観批判」や「基本パラダイム」の根底にある「類型的文化動態論」あるいは「類型的文化動態論」的視点からの脱却が求められているのである。

## (5) 「考古学的文化」の概念をめぐる議論の重要性

以上のような課題に取り組むためにも、筆者は縄文文化や弥生文化という「考古学的文化」の概念がより根本から議論されていいのではないかと考えている。先述のとおり、現在の縄文文化や弥生文化は、ある標準、典型に基づいて設定するには広すぎる時空間の範囲をもっており、そうである以上、縄文文化、弥生文化という言葉は、あくまでもその「全体」を示すものとして使用しなければならない。そうでなければ、たちまちそれぞれの本質的とされる「部分」が強調され、それ以外の部分が議論の周縁に追いやられることになり、その結果、時間的にも空間的にも複数の「文化」が対立的に存在するかのような状況が描かれてしまうことになる。

言うまでもないが、例えば続縄文文化、弥生文化、貝塚文化という「文化」区分は、絶対的なものではない。確かに、「考古学的文化」は型式のまとまりとして実在するが、それらは、あくまで、我々がそうした3つの「考古学的文化」を設定し、それに基づく「歴史」を構築するという、我々の思考の枠組みがあって存在し得るものなのである。

もちろん、弥生文化は、その時空間的範囲の広さもさることながら、その範囲内において、縄文文化には見られなかったほどの急激な社会的、経済的、文化的変化が生じていたことで、大きな時間的、空間的差異を内包するものとなっている。そしてそれが弥生文化を複数の「考古学的文化」に分割する必要性を生じさせていることも確かである。そうした試みとしては、古くは山内清男の「東部文化圏」と「西部文化圏」の区分があり〔山内 1964a〕、近年では、弥生文化の諸要素の時空間的動態に基づいた、さまざまな区分案が提示されている〔設楽 2000、藤尾 2011、森岡 2011 など〕。

それぞれの区分案の是非については、本稿の目的の範囲外であるため省略に従うが、ひとつ注意しておきたいのは、多くの区分案において、その根拠となる要素が、例えば水田稲作技術であったり、環濠集落であったり、青銅器や青銅器の祭祀であったりと、型式編年に基づかないものになっている点である。言うまでもなく、こうした要素の取り上げ方では、実はそれ自体が時間、空間の単位になっていないため、所与の弥生文化内の色分けはできても、型式の組み合わせによる「考古学的文化」の区分にはならない。水田であっても、集落であっても、青銅器であっても、全ての人工物は型式の分類とそれに基づく編年体系の構築が可能であり、それがあってはじめて「考古学的文化」の構成要素になり得るわけである。確かに、水田や集落形態のように、地域ごとの地形的条件によって大きく姿を変えるものについては、型式の設定に工夫を要するが、それでも編年体系の構築が不可能なわけではない。ましてや、型式学的研究の厚い蓄積のある青銅器などは、細かなレベルで構築された編年体系を「考古学的文化」の設定の議論にすぐにでも組み込むことが可能であるし、実際それによって、無文土器文化、原三国文化の系統と西日本各地（一部東日本も）の弥生

文化の系統の差異もより鮮明になるのではないかと考えている。

いずれにしても、「考古学的文化」をめぐるのは、編年体系上に配列された型式及び型式の組み合わせのグルーピングとして設定されなければならないことを明確に意識する必要がある。また、「考古学的文化」が、編年体系における時間軸上の変化の度合いと空間軸上の関係性の粗密の評価によって設定される、我々の「歴史観」と相互依存的な関係にある概念であるとの認識も重要である。そうした意識が希薄だと、日本列島や「日本文化」という、アприオリな枠組みを前提とした議論に陥りやすくなり、また、設定された「考古学的文化」の本質的な「部分」同士の議論に集中する傾向を生みだしてしまう。それがここで問題にしてきた「基本パラダイム」、「類型的文化動態論」と深く関わっていることは、もはや言うまでもないだろう（例えば、弥生文化を論じるにあたり、藤本強が提唱した「もう二つの日本文化」論〔藤本 1988〕を参照する研究者も少なくないが、藤本の主張は、「日本文化」という枠組み、あるいは日本列島という地域区分を前提とした「北の文化」「中の文化」「南の文化」という名称自体に如実に表れているように、「類型的文化動態論」による「日本文化」の多様性、多元性の主張と、基本的に同じ構造を持っていることに注意しなければならない）。

#### ④……………「水田中心史観批判」の問題点②

##### —考古学の研究成果をめぐる諸問題

##### (1) 栽培植物種子の分析方法に関する問題点

さて、ここからは、「水田中心史観批判」の基盤を形成してきた、考古学における「縄文農耕論」や「弥生島作論」の問題点を明らかにしていきたいと思う。

はじめに取り上げたいのは、栽培植物種子の研究をめぐる問題点である。先史時代における農耕技術の研究において、栽培植物種子の存在確認が重視されるのは当然である。そのため、戦前からその点に多くの努力が払われてきたのであるし、遺構覆土の水洗選別や土器圧痕のレプリカ法による分析など、手間のかかる方法の導入が図られてきたわけである。

そうした研究史のなかで、栽培植物種子研究をめぐる問題点、注意点などもかなり明確になってきており、特に栽培植物種子の同定、時期の特定、数量的評価の3点に細心の注意を払う必要があることは、すでに多くの研究者の共通認識になっていると言ってもいい。その結果、現在では、厳密な方法に基づく信頼性の高い栽培植物種子のデータが蓄積されてきているようである。

しかしながら、その一方で、依然、問題のある分析方法や、確実性が担保されない資料に基づく議論が繰り返されていることにも目を向けなければならない。それらの多くは、それほど遠くない将来に淘汰されていくとの希望的観測をもってはいるが、本稿で問題としている「水田中心史観批判」では、これまでもそして現在も、そうした問題を含む研究成果が大きな役割を果たしていることは否定できず、今しばらくその問題点の指摘を続けていかなければならないと思っている。

種子遺体や圧痕の分析における注意点については、以前詳細に及んだことがあるため繰り返さないが〔安藤 2006〕、例えば、種子の同定、特に圧痕の同定に関しては、現在でも、その種特有の構造や組織が確認されていないにも関わらず、何故か種の同定がなされている分析事例が少なからずあり、理化学的分析会社に委託された分析にもそうした例が認められる。種子の時期に関しても、



最近の後藤直の研究のように〔後藤 2011〕、コンタミネーションの危険性がきわめて高いと判断される事例（年代測定によって排除されたものも含まれる）を平然と集めて分析している例が後を絶たないのは、残念でならない。

種子遺体については、コンタミネーションの危険性が常に付きまとうため、遺構や遺物との有機的関係を確認できる資料に限定して分析することが肝要である。例えば、住居址床面上や食糧貯蔵に関わるとみられる遺構内、土器内などから多量にまとまって検出されるケースはきわめて有効な資料となるし、炉やカマドから明らかに火を受けた状態で検出された事例や、おこげなどとして土器に付着した例、年代測定の結果、遺構の年代と矛盾しない数値が得られた例も、遺構・遺物との関係を積極的に評価できるものとなる。ただ、多量にまとまって出土した資料であっても、そのなかに数粒程度含まれるような種子は除外して考えるべきであり、全体量が数粒程度のサンプルは、仮に年代測定で矛盾のない数値が得られたとしても、その数値が有効性をもつのは測定された個体のみであることにも注意が必要である。

## (2) 確実性の高い資料に基づく縄文文化・弥生文化の栽培植物の変遷

では、現在までに蓄積されている栽培植物種子の検出事例のうち、同定の不備やコンタミネーションの危険性の少ない、確実性の高い資料に基づいて、縄文文化・弥生文化の栽培植物の変遷を捉えてみるとどのようになるだろうか。この点については、私自身すでに何度かまとめており〔安藤 2002・2009〕、また縄文文化については中沢道彦の適切な整理があるため〔中沢 2009〕、それらをベースに最近の分析成果を加え、以下概要を記しておきたいと思う。

まず、縄文文化では、栽培されていた可能性のある植物の種子として、イヌビエ（縄文ヒエ）、ダイズ属（ツルマメ）、アズキ垂属、アサ、エゴマ（シソ属）、ヒョウタン、アブラナ属、ゴボウなどが挙げられる。ほかにも、クリを中心とする堅果類も人為的な管理が行われていた可能性がある。イヌビエ、マメ類に関しては、自然状態のものと区別できないものも多い一方で、馴化と評価可能な形態変化が認められる資料もあり〔吉崎 1992、中山 2009、小畑 2011：111-139 頁〕、遅くとも縄文時代中期には、これら日本列島に自生する植物の栽培あるいは管理が行われていたと考えていい。

「水田中心史観批判」的観点からすれば、イヌビエやマメ類の食糧としての比重に関心が集まることになりそうだが、縄文文化の遺跡の発掘事例が膨大な数に及んでいるなか、イヌビエは東北北部～道南のいくつかの遺構から、最大二千粒程度の検出例があるのみであり、今のところ局所的な現象と理解したほうがいい。一方、マメ類については、種子遺体、圧痕ともに、早期以降、本州島～九州島の広い範囲で検出されている。遺跡数は 70 箇所以上に達しており、なかには宮崎県野添遺跡のように合計で 600 粒ものアズキ属が検出された事例もある〔小畑 2011：113 頁〕。しかし、こちらも、その全てに馴化が認められるわけではないし、依然として弥生文化のコメのように 1 ㍩以上のまとまりで出土した事例はなく、マメ類同士の比較でも、弥生文化における出土量に遠く及ばない点〔安藤 2009：29 頁〕には注意をしておいたほうがよさそうである。マメ類の場合、粒径の大きさからみて、ある程度まとまってさえいれば、発掘調査時に肉眼でも容易に見ることができるはずである。検出事例の数と大型化を根拠に、縄文時代のうちにマメ類がメジャーフードになっていたとする意見もあるが〔小畑 2011：111・135 頁〕、以上の点からみて、現状では、イヌビエはもちろん、

マメ類もメジャーフードと言えるほどの寄与率を想定することは難しいと言わざるを得ない。

では、「水田中心史観批判」で定説になっているかのように語られてきた、イネ科の穀類（イヌビエを除く）はどうかというと、現在までのところ、北部九州地域における弥生文化の成立期、あるいはその直前の弥生文化の揺籃期（縄文時代晩期後葉）を遡る確実な事例はない、というのが学問的に正しい表現になる〔安藤 2009：27 頁，中沢 2009：240 頁〕。コメは、刻目突帯文土器の初期に最古の圧痕の事例があり（島根県板屋Ⅲ遺跡）、ほどなく九州地方～近畿地方の刻目突帯文土器に安定的に見られるようになる。一方、コメ以外のイネ科穀類に関しては、徳島県三谷遺跡で刻目突帯文土器の時期のアワ・キビの圧痕が検出され〔中沢ほか 2012〕、近畿地方でも同時期のアワ・キビの圧痕が発見されたとの報告がなされている〔遠藤 2012〕。なお、中部地方の縄文時代晩期後葉の土器からは、多数のアワやキビ圧痕と、わずかなコメやオオムギの圧痕が検出されているが、これらはいずれも、刻目突帯文土器以降の時期に並行するものなので注意が必要である。

つまり、東日本南部以西では、地域ごとの弥生文化成立期あるいは弥生文化に連なる揺籃期において、コメ、アワ、キビが、その構成に地域差をもちつつ定着していたことが想定できることになる。一方、東北地方では、弥生文化成立期においてコメの圧痕が安定的に検出されているものの〔中沢・丑野 2010，高瀬 2010〕、今のところ他のイネ科穀類の確実な事例はない。こうした穀類の検出状況からみて、弥生文化の水田稲作技術とアワ・キビ畠作技術は、北部九州地域の弥生文化成立期あるいは揺籃期に、ほぼ同時に朝鮮半島南部からもたらされた可能性が高く、それらの技術が、各地の諸条件に応じて晩期縄文文化の生業の一部に組み込まれていくことで、地域ごとの弥生文化が形成されていったと理解することができる〔安藤 2009〕。いずれにしても、各地の弥生文化の成立期とされる時期の前後に、水田稲作技術を含む、農耕技術の展開上の画期があることは動きそうにない。

その後、北部九州地域では刻目突帯文土器の夜臼式期から、東海地方西部以西では概ね遠賀川式土器が展開する時期から、急速にコメがイネ科穀類遺体、圧痕の中心になっていく。東日本南部でも、大型の集落遺跡が形成されはじめる弥生時代中期において、コメが他のイネ科穀類を圧倒するようになる。もちろん、アワ・キビの検出例がないわけではない。しかし、コメの検出例に 10 ℓ を超える事例が多数認められ、また 1 ℓ 程度の例であれば、もはや枚挙に暇がないほど存在するのに対し、アワ・キビは、そのほとんどが数 cc というレベルの検出量に留まっており、何より、肉眼でも検出可能な 1 ℓ 以上のかたまりをなすような例が未だ発見されていないことには注目せざるを得ない〔安藤 2009：28・29 頁〕。つまり、それぞれの地域・時期における生業全体に占める農耕の比重自体に大きな違いがあった可能性は残るものの、こうした時期の農耕が、コメに集中、つまり水田稲作に急速に収斂していったことは、もはや動かしようがなくなっていると言っているといえる。

なお、これまで弥生文化の遺跡から比較的多量に出土するとされてきた、オオムギ、コムギに関しては、そのほとんどがコンタミネーションと判断せざるを得ないものであり、現状で確実性が高いと言える資料は、前期並行の山梨県中道遺跡出土土器のオオムギ圧痕 1 点〔中沢ほか 2002〕と、年代測定の結果、弥生時代後期のものであることが確認された、長崎県壱岐島からかみ遺跡のコムギ 1 点〔小林ほか 2009〕のみに限られることになった。つまり、ムギ類は弥生文化においてほとんど定着しなかったと考えていいことになる。ただ、壱岐島では、住居址や溝等の遺構覆土から多数

のオオムギ・コムギが出土する事例があり [甲元編 2004, 高宮 2008・2009], 朝鮮半島に近接した地域では, 局所的にムギ類の生産が定着していた可能性がある。

以上のような弥生文化の農耕技術の展開, つまり水田稲作技術の定着初期にコメ, アワ, キビがセットになり, その後, 急速にコメへの集中が進んでいく背景は, これまで何度か解説してきたとおりである [安藤 2008・2009 など]。したがって, ここでそれを繰り返すことは控えるが, 地形, 気候, 土壌などの自然的条件をはじめ, 水田稲作とアワ・キビ畠作の技術的特徴と生産性の違い, 地域ごとの縄文時代晩期の集落のあり方, 弥生時代以降の人口の増加と関係する「自然」の超克を志向する世界観の成立などが, 相互に絡み合っているものと考えている。

こうしたなか, 弥生時代終末期の東京都秋川流域で, アワ・キビ畠作を中心とする集落遺跡群が確認されていることについては [東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター 2000, あきる野市前原遺跡調査会 2004], 少し注釈が必要である。秋川流域は, 弥生文化のコメが中心となる時期以降において, アワ・キビ主体の様相が明らかになった, 今のところ唯一の例であるが, 筆者は, 弥生時代後期～終末期における, こうしたアワ・キビ主体の地域は, 他にも何ヶ所が存在する可能性があるかと推測している。これらは, 前に述べたとおり, 鉄器の普及などによる集団関係の複雑化や地域間交流の活発化のなかで, 水田不適地となる高所や交通ルートの要衝への集落の進出が必要になったことを示す事例であり, 水田不適地であるがゆえに畠作や採集活動の比重が高まったと理解できる集落である。つまり, 弥生時代後期以降, より大きく複雑な社会への動きが本格化するなか, 地域集団レベルの分業的關係が進展することで, こうした水田不適地の集落群が出現したことになる。詳しくは触れないが, 弥生時代終末期には, 福岡県西新町遺跡のような海の交易拠点となる集落の発達もみられ [大阪府立弥生文化博物館 2004], こうした動きに, その後の列島規模の社会的経済的關係の複雑化のなかで, 「海民」「平地民」「山民」的集団やそれぞれの「文化」的特徴が明確化してくる先駆けを見ることができると考えている。

なお, 本稿では, プラント・オパール分析とその成果について触れることができなかったが, この点については, いずれ詳細に及ぶ心算である。

### (3) 「水田中心史観批判」における縄文文化・弥生文化の農耕のイメージとの齟齬

以上のように, 確実性の高い資料に絞って, 縄文文化, 弥生文化の農耕技術の展開をまとめてみると, 「水田中心史観批判」の基盤となってきた縄文文化, 弥生文化の農耕のイメージと大きく異なる結果になることがわかるだろう。

もちろん, 縄文文化におけるコメをはじめとするイネ科穀類の存在を肯定的に捉える考古学者は少なくないし, 近年の出版物でも, 縄文時代後・晩期におけるコメやイネ科穀類の存在は「確実」と, 積極的な評価がなされているもののほうが目立っている。また, 弥生時代の農耕に関しても, 依然, 弥生時代を通じてコメ以外のイネ科穀類の比重を高く見積もる見解が根強いようである。しかし, 私としては, こうした主張をされる方々には, 是非ともその根拠を明確に示していただきたいと思っている。

当たり前のことであるが, 仮に問題のある資料が 100 あろうと 1000 あろうと, 決して「確実」にはならないし, 確実性の高い 1 つの資料にも遠く及ばない。イネ科穀類は微小であり, 遺体を扱

う場合にはコンタミネーションの可能性を常に考慮しなければならないし、圧痕についても種の同定と時期決定にかなりの慎重さが要求されることを肝に銘じる必要がある。不確実な資料の「可能性」にかけるのではなく、潔く議論から除外するのが責任ある科学的な態度なのではなからうか。

とはいえ、私は、実のところ、こうした問題以前に、縄文文化のイネ科穀類、弥生文化のコメ以外のイネ科穀類の探求に、水洗選別や圧痕分析を実施しなければならない現状に、もっと目を向けるべきではないかと考えている。つまりこういうことである。仮に住居址床面や貯蔵穴内に1ℓ以上のまとまりや塊状をなして種子が存在していれば、その検出にあたり粒径はさほど問題にならなくなる。事実、弥生文化の遺跡では、コメのそうした例が、戦前から検出されていたし、現在では全国的な把握が困難なほどの数に及んでいる。これに対し、世界的にも突出した発掘調査密度を誇る日本において、未だ縄文時代に遡るイネ科穀類や弥生文化のコメ以外のイネ科穀類のそうした例が検出されないというコントラストこそが、縄文文化・弥生文化の農耕の特徴を雄弁に物語っていると考えられるからである。

もちろん、私は、縄文文化におけるイネ科穀類の存在を否定しているわけではない。しかし、厳密な方法による分析事例が少しずつ増えてきている現在でも、縄文文化における確実性の高い資料が検出されず、また弥生文化ではコメが主体となる時期以降のコメとその他のイネ科穀類との格差がむしろ開いていっていることについて、そろそろしっかりと議論すべき段階にきているのも確かであろう。

朝鮮半島の櫛目文土器文化における、イネ科穀類やそれに関係する考古学資料の検出が続くなか、「縄文農耕論」は、隣接する櫛目文土器文化にあれば縄文文化にもあるはずだ、という前提によって先走りし過ぎた感があるようだ。そこに、縄文文化の農耕技術の存在に注目してきた「水田中心史観批判」、「基本パラダイム」が絡んでいなかったとは言えないだろう。また、縄文時代におけるマメ類栽培の評価も、こうしたイネ科穀類の動きを絡めた議論が必要になってくるものと思われる。何となれば、耕起を伴う畠においてマメ類がメジャーフードと評価し得るほど生産されていたのであれば〔小畑 2011：135-137頁〕、乾燥耕地の連作障害を考慮しても、櫛目文土器文化からのイネ科穀類の導入がもっとスムーズに進んでいはいはずだからである。いずれにしても、今後は、なぜ九州島の縄文文化にイネ科穀類の農耕技術が定着しなかったのかという問いを含め〔藤尾 2004：123・124頁〕、櫛目文土器文化と縄文文化の比較、及びマメ類等、他の栽培植物の生産技術との関係を視野に入れた、幅広い議論を行っていく必要がある。

とはいえ、櫛目文土器文化でイネ科穀類が生産されていたことは間違いないわけであるから、いつかは九州島を含む西日本において、縄文時代に遡るイネ科穀類が検出される可能性は高い。しかし、種子の存在＝農耕技術の存在ではないし、それをもってただちに縄文文化の生業についての評価を変えなければならないというわけでもない。むしろ、そうした発見がいたずらに諸分野の「水田中心史観批判」を過熱させることがないように、冷静な評価を行っていくことが考古学者の努めだと言ってもいいだろう。

弥生文化に関しても、今後ますますコメ以外のイネ科穀類やマメ類の検出事例は蓄積されていくはずである。場合によってはコメと同様、10ℓ以上のまとまりで出土することがないとは言えない。また、畠址に関しても、1万㎡を超えるような規模で検出される可能性は充分にあると思っている。

しかし、そこで重要なことは、それらの評価を、その地域、時期において想定される社会、そしてそれと連動した生業全体を見渡したうえで行っていくことである。実のところ、大規模な集落遺跡が各地に形成される弥生時代において、10ℓ程度の穀類や1万㎡程度の耕地で生産される穀類は、たいした量の食糧ではない。見た目や数値に踊らされず、広い視野で冷静な評価を行っていくことが考古学者の責務である。

#### (4) 前方後円墳時代～古代における農耕技術の展開をめぐる問題

前方後円墳時代以降の農耕技術についても、以前まとめたことがあるため〔安藤 2002・2008〕、ここではその概要を記し、「水田中心史観批判」、「基本パラダイム」との齟齬を明らかにすることに主眼を置く。

前方後円墳時代以降の種子遺体については、筆者自身十分な集成を行っておらず、また今のところ全国的な集成もないようである。ただし、遺構覆土の水洗選別の事例は、地域的に偏在しているものの、かなりの数に及んでおり、すでに地域ごとの考察はいくつか行われている〔橋本 1998, 榎原 1999, 洞口 2007・2008, 大庭 2010, 三吉 2012 など〕。これらの研究を踏まえ、さらに最近の水洗選別の事例〔高瀬 2006, 洞口 2011 など〕を加えてその傾向を捉えると、前方後円墳時代では未だ事例が限られているものの、中期以降コメ以外のイネ科穀類が増加する傾向があり、河内平野においてコムギの出土例が目立つといった地域差もみられるようである。そして古代は、全国的なムギ類の増加が特徴となる。

前方後円墳時代中期は、渡来集団による新しい技術の導入が進んだ時期であり、深耕を可能にするU字形鋤刃先や、牛馬飼養と組み合わせさせた畝作技術は、そうしたなかで日本列島に定着した〔都出 1989: 88・89 頁など〕。厚い火山噴出物の堆積によって過去の生活面が残存した遺跡の多い群馬県では、前方後円墳時代中期後半以降の、馬の放牧や休閒を挟んだ切替畝と推定される畝址が多数検出されており、その実態を具体的に知ることのできる貴重な事例になっている。東日本では、関東地方を中心に、前方後円墳時代中期後半あるいは後期から、水田に不適な丘陵や台地で集落遺跡が増加することが古くから明らかになっており、多様なイネ科穀類の出土と合わせて、畝作を含む多角的な農耕が営まれていた可能性が早くから指摘されていた〔和島・金井塚 1966 など〕。都出比呂志が注目した京都府嵯峨野における前方後円墳時代後期の集落遺跡の増加など〔都出 1989: 79 頁〕、同様の現象は西日本でも生じているようであり、この時期に、大陸系の畝作技術の広範な展開を想定することができる。

東日本では、古代になるとそうした水田不適地での集落遺跡の形成がより顕著になる〔能登 1986, 鶴間 1986, 安藤 2002 など〕。学史的に「離れ国分」〔中山 1976〕などと呼ばれてきたものもその一部であり、縄文時代以来人間活動の痕跡が途絶えていた山地地域における集落遺跡の出現も指摘されている〔能登ほか 1985〕。先述の前方後円墳時代中期以降の穀類構成の変化、つまり、コメ以外の穀類の増加が認められ、古代以降、ムギ類が中心となるという穀類構成の変化は、こうした農耕技術や集落遺跡の動向とともに生じていたことになる。

歴史人口学では、古代の人口は500万人～700万人前後で推移していたと推定されており、弥生時代～前方後円墳時代に比べて人口増加率が低くなっていた可能性が高い〔鬼頭 1983 など〕。つまり、

古代は、当時の生産様式における人口支持力の上限に近い状態が続いていたと考えることができ、律令国家が8世紀に相次いで打ち出した耕地拡大政策は、そのことを物語る事象と理解できる。そうしたなか、飢饉対策として雑穀の生産を奨励する官符が8世紀～9世紀に出されており、715年にはアワ、723年から820年までの4回の官符ではオオムギ、コムギ、839年・840年には多様な雑穀が推奨されていたという〔木村1996：58・59頁〕。考古学資料にみられた、古代の集落遺跡の立地の変化とムギ類の増加は、まさにこうした状況と関係するとみていだろう〔安藤2008：176・177頁〕。

となると、先述の弥生文化における水田稲作への集中という現象からみても、日本文献史学の「水田中心史観批判」において主張されてきた、古代・中世における畠作の比重の高さは、縄文文化・弥生文化から続くものではなく、前方後円墳時代、特に古代に明確化したものと考えざるを得なくなる。また、コメ以外の穀類の増加に国家の政策が絡んでいたとすれば、「基本パラダイム」のように、律令国家を水田中心の生業の起点として位置づけることはできなくなる。木村茂光が言うように、古代末が荘園公領制成立に連なる大開墾の時代であるとするならば〔木村1996：109-136頁〕、そうした耕地の拡大、生産量の増加を支える農耕技術の発達、つまり牛馬耕の普及、大規模造成を伴う大区画水田の展開、施肥技術の確立、コメ・ムギ二毛作の開始などは、人口圧がかかり続けるなかで、国家や荘園領主による大陸系技術の導入や生産量増加のための政策から、農民の地道な工夫といったさまざまなレベルの動きが絡み合った結果として理解しなければならない。

網野善彦は、古代・中世の河海、山を舞台とする交通・流通をになった非農業民の存在に注目し、従来の「水田中心史観」的、農本主義的な社会構造や支配のシステムの再考を迫った〔網野1993〕。こうした交通・流通を担う集団の萌芽が弥生時代後期・終末期にみられることは先に指摘したとおりであるが、そうした交通・流通を担いつつ海や山の生業に特化した集団が、生産諸関係の枠組みの拡大、複雑化とともに、社会的・経済的な独立性を持ち得るようになる、つまり「海民」的、「山民」的社会を形成するのが、古代・中世なのであろう。そうした意味を含め、律令国家は、水田中心の生業の起点ではなく、むしろ古代・中世以降の多様な生業の展開の起点、あるいは発展期として評価すべきなのである。

「水田中心史観批判」のなかで形成されてきた「基本パラダイム」、そしてそれを支えてきた「縄文農耕論」、「弥生畠作論」は、すでに抜本的な見直しが必要になっているのである。

## ⑤……………「水田中心史観批判」から学ぶこと

### (1)「歴史観」に対する批判的検討の重要性

これまで論じてきたように、「水田中心史観批判」には多くの問題があり、なかでも「基本パラダイム」、「類型的文化動態論」に関しては、全面的な見直しが必要になっていると言っていい。しかし、これまでの批判は、決して「水田中心史観批判」全体を否定するつもりで行ってきたわけではない。「水田中心史観批判」は、これから述べるように、日本史学や日本文化論において、非常に大きな意味をもった動きであったことは疑いないし、今後の研究を進めていくうえで学ぶべき点

も多い。そこで最後に、「水田中心史観批判」から継承し、発展させていくべき点をまとめておきたいと思う。

「水田中心史観批判」は言うまでもなく、「水田中心史観」とされた「歴史観」に対する批判である。「考古学的文化」のところでも記したとおり、我々の構築する「歴史」は、我々の「歴史観」と表裏一体の関係にある。そして「歴史観」は、我々の「文化」「世界観」、個人レベルで言えば、自身の知識・経験の蓄積のなかで形成されるものである。

そうである以上、「歴史」の研究において、構築された「歴史」の背後にある「歴史観」を認識することがきわめて重要になるはずである。それは過去の「歴史」研究だけでなく、自らの「歴史」研究にあっても同様である。「水田中心史観批判」は、戦前・戦後の「日本史」「日本文化論」で展開されていた言説のなかに、水田稲作を中心軸に据えて「歴史」を説明しようとする共通の構造を見出し、それを「水田中心史観」と称して批判の対象にしてきた。そして、畑作をはじめとする他の生業を組み込んだ、別の構造をもつ「歴史観」によって、別の「歴史」が構築し得ることを示そうと試みてきたわけである。

もちろん、そこで展開された議論にも、ここで指摘したさまざまな問題があるし、過去の「歴史」研究の多くを「水田中心史観」とまとめて議論し得るのか、という根本的な疑問もないわけではない。しかし、そうした問題点や疑問点は別にして、「水田中心史観」（「単一文化論」「単一民族論」なども同様）という言葉が「歴史」研究の場に定着することで、少なからぬ研究者が「歴史観」を意識した議論を展開してきたこと自体は、高く評価されている。

翻って我々の足元を見てみると、今日の考古学の研究において、「歴史」研究における「歴史観」の重要性の認識、自他の「歴史」の背後にある「歴史観」を意識的に取り上げ、それを研究の対象とする姿勢が根付いているのかと言えば、実に心もとない状態にあるように思えてならない〔藤尾・李 2010, 総合討論の安藤コメント:182-186頁〕。もちろん、私には、日本文献史学や日本民俗学等の現状についてコメントできる蓄積も能力もないが、「歴史」の研究において「歴史観」に対する自覚が欠如してしまうということは、我々の「文化」の価値観や、個人の知識・経験といったものが、理論としての体系性をもたないまま、「歴史観」の役割を果たしてしまうことを意味する。そうした「歴史」は、いかに多くの資料を集成し、「実証」を謳って構築されていたとしても、学問的に意味のあるものにはなり得ない。

つまり、「水田中心史観批判」をめぐる学史の検討は、「歴史観」に対する意識を高めてくれるという点で、我々にとって大きな意味をもつと考えられるのである。

## (2) 視点の多様化の重要性

さて、「歴史」と「歴史観」が表裏一体のものである以上、同じ地域、同じ時期、同じ資料を対象にしても、「歴史観」次第で複数の「歴史」が構築できることになる。そうした「歴史」を多面的・多角的にみることを示してきた点も、「水田中心史観批判」の重要な側面であった。

私は、「水田中心史観批判」における、「歴史」を多面的・多角的に捉える視点は、大きく三つの研究の方向性にまとめられると考えている。一つは、「歴史観」の基本構造を大きく変えずに、説明の軸を単一から複数にすることで、より複雑な「歴史」を描こうとする方向である。二つめは、

全く異なる位相にある「歴史観」に基づく、別角度からの「歴史」を構築しようとする方向、そして三つめは、より限定的な視点、つまり主題を絞って「歴史」を描こうとする方向である。

木村茂光ら日本文献史学の畠作研究や近年の山村史研究は、一つめの色合いが濃い研究であり、日本民俗学における安室知の「複合生業論」も同様の方向性をもった研究と言えるかも知れない。一方、ここで否定的な見解を述べた「類型的文化動態論」は、意図的にそれまでとは異なる角度で「日本文化」を捉え直そうとした、二つめの方向の事例と評価してよく、「日本」「天皇」「農民」などの常識的概念をひとつひとつ見直しつつ、従前とは異なる角度から「歴史」に光を当て続けた網野善彦の研究も同様であろう。そして三つめには、法政大学出版の「ものと人間の文化史」シリーズなどをはじめ、実に多くの研究事例をみることができる。

もちろん、個々の研究はそれぞれ幅を持っているため、全てを明確に3つに分類できるわけではないし、そうしたところでたいした意味もない。重要なことは、「水田中心史観」への批判が叫ばれるなかで、非常に多様な視点からの「歴史」が描かれるようになったという事実である。視点の多様化は、それ自体、「歴史」がより「厚く」語られるようになったことの証左であるし、それぞれの「歴史」及び「歴史観」の相互批判的な関係が形成されていくことで、既存の枠組みの再検討を含めた議論の活性化、深化が期待できる。それだけでなく、視点の多様化によって、従来注目されていなかった資料に目が向けられることになり、既存の資料の再検討、未知の資料の探求、そして新しい分析方法の開発・導入にもつながることになるはずである。

事実、これまで述べてきたように、文化人類学や日本民俗学が主導してきた「類型的文化動態論」は、その是非はともかく、「日本史」、「日本文化」の見方に大きな影響を与えたことは疑いないし、網野善彦等の社会史的視点は、視点をずらすことによる既成の枠組みの再検討が、それまで見過ごされていた「歴史」のさまざまな側面に光を当てることにつながる点を明示してきた。また、日本文献史学の畠作研究が、畠作に関する文献史料の徹底した集成や荘園絵図等の絵画資料への研究領域の拡大を促し、考古学における縄文農耕論や弥生文化の農耕の再検討が、水洗選別法やプラント・オパール法、レプリカ法などの新しい分析方法の導入及び発達の契機になったことも確かであろう。

もちろん、視点が多様化しただけでは、上記のような相乗効果がすぐに現れるとは限らない。例えば、「類型的文化動態論」的視点による「水田中心史観批判」では、その当初から学際的な研究が行われていたものの、それぞれの研究成果や解釈が、基本的に「類型的文化動態論」に基づく「歴史観」に沿った内容にまとまる傾向が強くみられる。その結果、能登健の一連の弥生時代～古代の畠作に関する研究などの、そうした「歴史観」に反する内容を含む成果〔能登1986、能登ほか1985など〕があっても、相反する部分についてはほとんど取り上げられないという状態が続いてしまった。つまり、視点が多様になっても、全体がひとつの方向を向いてしまうと、相互批判的關係にない、都合のいい成果のみの安易な引用や、相互にもたれ合う「歴史」の構築へと流れていってしまう危険性があるということである。

とはいえ、我々が内省的姿勢、相互批判的姿勢を意識しつつ、資料批判の徹底と、ひとつの現象に対する多様な解釈の可能性を考慮した研究を進めていけば、こうした危険性の多くは回避されることになろう。「水田中心史観批判」は、「水田中心史観」を強く意識し過ぎたが故に、「基本パラダイム」や「類型的文化動態論」のような、ひとつの方向にまとめようとする強い潮流を作り出し



てしまったが、これも反面教師的な意味で「水田中心史観批判」から学ぶべきことのひとつに数えていだろう。

### (3) 徹底した資料批判と理論をめぐる議論の重要性

ところで、私がこれまで行ってきた「水田中心史観批判」や「縄文農耕論」、「弥生畠作論」に対する批判的検討の成果は、縄文文化、弥生文化の生業論ではあまり引用されることがない。一方、そのなかで展開してきた諸論、例えば、各地の弥生文化の初期にアワ・キビを含む穀類構成がみられることをはじめ、ある時期からコメが主体になること、前方後円墳時代中期以降にコメ以外の穀類が増加することなどについては、私の議論ではなく、そうした状況を明確に示す分析結果の提示、つまり「発見」によって、はじめて多くの研究者に意識されることになるようである。

誤解しないでいただきたいが、私は何も私の研究の扱いに不満を持っているわけではない。また、当然のことながら「発見」を軽視するつもりもない。そうではなくて、「発見」が非常に重視される一方で、私が行ってきたような研究に対する関心が低くなる点に、日本考古学のひとつの特徴が明瞭に表れているのではないかと、そしてそれ故に、今後も「水田中心史観批判」の一部と同じ轍を踏んでしまうのではないかと、ということに注意を促したいだけである。

「観察の理論付加性」を持ちだすまでもなく、現象の理解が、理論、つまり現象を論理的に説明するための前提的枠組と不可分の関係にあることは、我々の日々の経験を振り返るだけでもすぐにわかるはずである。つまり、「発見」や「事実」として提示される分析や調査の成果も、個々の研究者がもつ理論、あるいは知識・経験から独立しているわけではなく、むしろそれと密接に結びついていることを認識しなければならない。これまで述べてきたように、「水田中心史観批判」の多くの研究が、問題を含む「観察事実」に立脚しながらも、「基本パラダイム」や「類型的文化動態論」のような理論内の議論に固執することで、長らくその問題点に気がつかない状況を作り出してしまったのも同じである。

先述のように、視点の多様化が進んでも、理論に対する批判的・内省的姿勢が定着していないと、複数の分野が依存し合いもたれ合う「歴史」の形成へとつながってしまう危険性がある。今後も歴史学における視点の多様化は進んでいくものと考えているが、そうしたなかで、我々は、「水田中心史観批判」の反省を踏まえ、より一層、個々の「観察事実」の背景にある理論を、批判的、内省的に取り上げていかなければならない。

最近、縄文文化における穀類存在の有力な証拠として注目されていたコクゾウムシ圧痕が、縄文時代早期の土器から発見された [小畑 2011]。かねてより縄文文化のコクゾウムシを穀類とは無関係と考えていた私にとっては、特段不思議なことではなかったが [安藤 2006: 119 頁・2009: 27 頁]、縄文時代のイネ科穀類の存在を積極的に論じてきた人々には、まさに「想定外」の事態だったらしい [小畑 2011: 182 頁]。もちろん、私が、縄文文化のコクゾウムシを穀類と無関係と結論付けることができたのは、勘が良かったからでも、運が良かったからでもない。そうした理解に至った背景には、圧痕や種子の資料批判によってコクゾウムシ圧痕と穀類圧痕の明確な時間のズレに気がついていたことと、コクゾウムシの生態に関わる研究や情報を集めた結果、多様なデンプン質食糧を利用していた縄文時代には人間の生活に入り込みやすく、粉の状態での貯蔵が一般的だった弥生時代

以降には減少するという理論的予想ができていたことがある。

実証を重視してきた日本考古学だからこそ、個々の「発見」あるいは「観察事実」を鵜呑みにするのではなく、その背景にある理論の是非から検討することが求められる。そして、そうした検討を繰り返しながら、より多くの現象を説明し得る理論的枠組みの構築を目指す必要がある。我々は、山内清男の研究を通じて、仮に資料的な制約があったとしても、広い視野と豊富な知識に裏打ちされた全体論的かつ関係論的な理論を構築していけば、ミネルヴァ論争で示されたように〔山内1936〕、問題ある資料に適切に対処することができ、その後の編年研究の展開にみるように、「想定外」の事態に見舞われにくくなることを知っている。「想定外」を既存のパラダイムのなかに覆い隠すのではなく、「想定外」が少なくなることを目指し、広い視野で理論を鍛えることが重要なのである。繰り返しになるが、こうしたことも「水田中心史観批判」の学史から学ぶべきことのひとつと考えている。

#### (4) 「観察事実」の批判的検討

最後に、「発見」や「観察事実」と、理論との関係、そして「発見」や「観察事実」を鵜呑みにすることの危険性について、具体的な「観察事実」の批判的検討を通して説明してみたい。取り上げるのは、静岡県手越向山遺跡の「畠址の可能性がきわめて高い」とされた遺構である（図1〔静岡大学人文学部考古学研究室2011〕）。この遺構を取り上げるのは、すでに弥生時代の畠址の事例として注目され始めており〔設楽2009：6頁〕、今後も「弥生畠作論」の根拠として使用される可能性が高いと考えられるからである。

遺跡と調査の概要については省略するが、問題の「畠状遺構」は、中期後葉の方形周溝墓の墳丘盛土の下から発見されたもので、時期は中期前葉と推定されている。ここでまず問題にしたいのは、この遺構がどのような根拠をもって畠址と判断されたかである。

報告書によると、「畠状遺構」は、段切り状の掘り込み内に堆積した「人為的攪拌を示す土壌」からなる。ただ、他の遺跡の弥生時代～古代の畠址のように、明瞭な畝が検出されたわけではなく、逆に他の遺跡の畠址から、本址のような「人為的攪拌を示す土壌」が確認されているわけでもない。プラント・オパールや花粉分析では明瞭な植物栽培の証拠は得られず、また土層の水洗選別でも種子遺体は検出されなかった。では、何をもって畠址の可能性がきわめて高いと判断したのかというと、報告書を読む限り、耕作土とされる攪拌土層の微細堆積相の分析により、本来の土層層位が均一に混合され、二次団粒が発達していることが示された点が、唯一の根拠になっていることがわかる。

しかしながら、その分析結果の文章を読むと、畠の耕作土と方形周溝墓盛土の双方の土層サンプルを採取しているにも関わらず、肝心の両者の違いが示されていないばかりか、文中で土壌微細形態のみで畠を同定することの困難さを示す研究が引用されているなど、どうして土壌の混合と二次団粒の発達をもって畠址と判断できたのかその理由が明示されていない。つまり、唯一の根拠も果たして盤石なものと言えるのか、疑問視されても致し方ない状況なのである。

翻って「畠状遺構」そのものをみると、その下部構造とされる地山黄褐色土層に掘りこまれた溝状の凹凸とテラスが、方形周溝墓の北溝と完全に一致するカーブを描き、かつ方形周溝墓の方

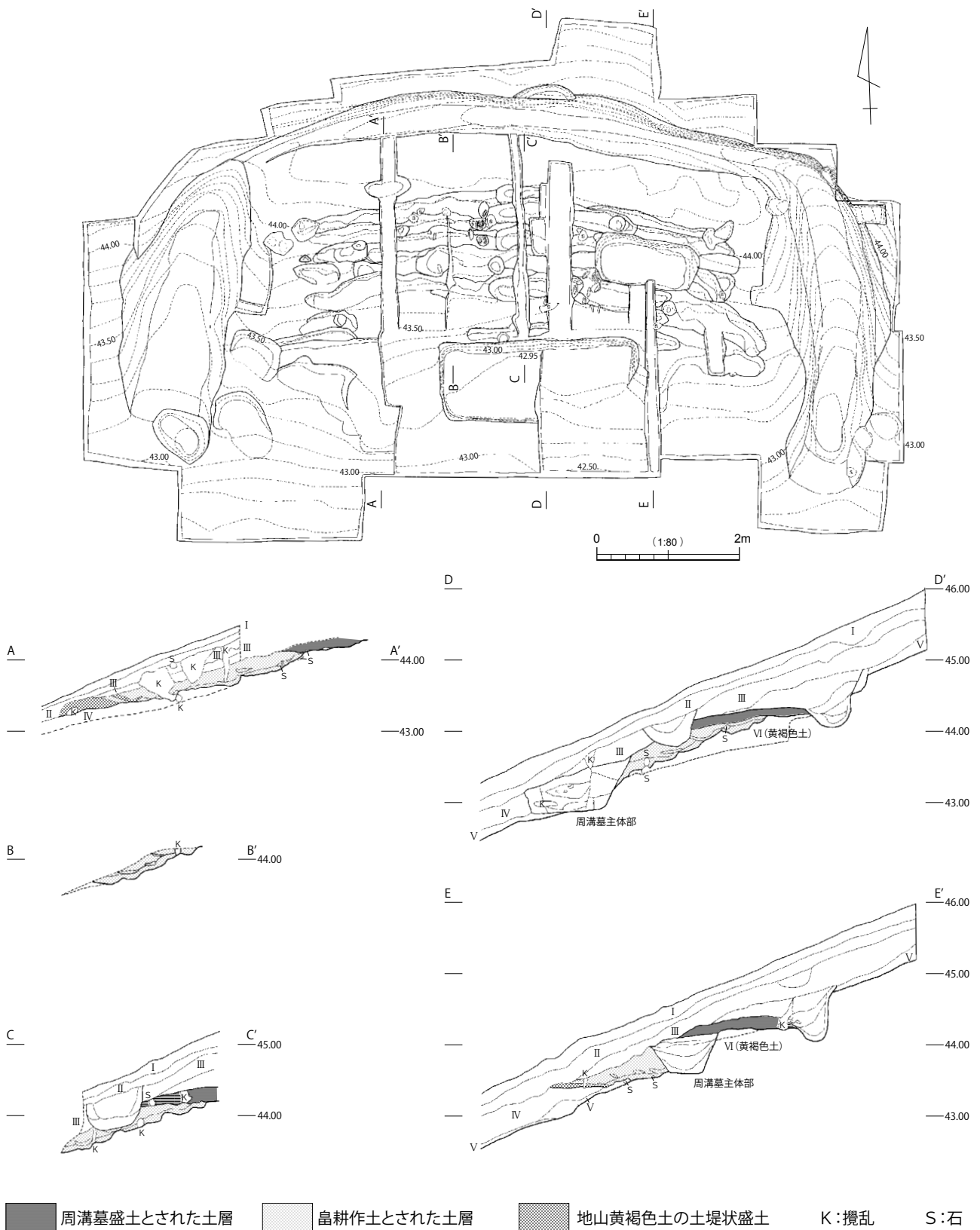


図1 手越向山遺跡の畝址の可能性がきわめて高いとされた遺構(報告書より一部改変)

台部内にほぼ均等の余白をもって収まっていることがわかる。報告書の想定通り、中期前葉の畠の掘り込みを利用して方形周溝墓を造ったとしても、200年にも及ぶ時間を挟みながらのこの完全一致は何とも不思議である。方形周溝墓の方台部盛土とされる土層が、畠耕作土とされた攪拌土層を、間層を挟まず直接覆っていることからしても、むしろ溝状の凹凸と攪拌土層が方形周溝墓と有機的な関係にある可能性を積極的に検討すべきだったのではなかろうか。

さらに注目すべきは、攪拌土層が、一部地山黄褐色土層まで掘り込んだテラスと溝状の凹凸の上に堆積しており、そのテラスの下端に攪拌土層の流出を防ぐかのように地山の黄褐色土を積んだ土堤が形成されていることである。こうした土堤状の堆積は、西日本を中心とする古墳の墳丘によくみられるほか、福井県小羽山墳墓群、岐阜県象鼻山1号墳のような弥生墳丘墓～初期古墳でも確認されている〔青木2003〕。また、攪拌土層には、灰褐色土の薄い間層を挟みつつ、土堤側から黒褐色土を積んでいった様子がところどころに認められ、小池勝典のいう「山寄せタイプ」の盛土、その上の方形周溝墓盛土とされた土層を含めれば、山寄せで平坦な工程面を造ったうえで盛土を重ねる「B-2」類に近い手法が取られていたとも考えられる〔小池2006:3-8頁〕。土堤に使用された地山の黄褐色土の供給源も、方形周溝墓の溝と考えれば理解しやすくなるだろう。

つまり、テラスと溝状の凹凸、及び土堤は、方形周溝墓の墳丘を構築する際の盛土の流失を防ぐ構造であり、攪拌土層は方形周溝墓の墳丘盛土の下半部と解釈できることになる。プラント・オパール、花粉、大型植物遺体の分析で植物栽培の証拠が得られなかったことも、この点を傍証しよう。本州島一帯の畠の輪作体系の事例や、アワ・キビが多い中期前葉の穀類構成からみても、花粉を残さない根茎類や野菜等に特化した畠との報告書の想定には、相当な無理がある。もちろん、古墳の墳丘の構築時において本例のように地山まで掘削する例は少ないようであるが、これも急斜面における工夫と考えれば特に問題にならない。手越向山遺跡の「畠状遺構」は、特異な構造をもった畠址などではなく、斜面地における方形周溝墓の築造技術を示すきわめて重要な遺構として捉え直さなければならないのである。

手越向山遺跡は、あくまでもひとつの例として挙げたに過ぎないが、複数の分野の研究者が集まりながら、その遺構が畠址であるとの前提（理論）のなかだけで議論を収束させてしまった典型的な例と言える。多くの考古学者や他分野の研究者が引用する考古学的な「観察事実」にも、こうした問題を内包した事例が数多く存在するのであって、特に希少な「発見」例であり、かつ論理上、その「観察事実」への依存度が高くならざるを得ない資料の場合には、多様な可能性を考慮した徹底的な資料批判が不可欠になることを忘れてはならない。

## ⑥……………結語

以上、「水田中心史観批判」をめぐる、学史を整理しながらその展開過程、特に「基本パラダイム」の形成の背景を明らかにし、そのうえで「水田中心史観批判」の問題点と、今後継承発展させていくべき点を論じてきた。論点は多岐に渡ったが、その結論を短くまとめると以下ようになる。

「水田中心史観批判」は、既存の研究に対する批判的姿勢と、多様な視点からの「歴史」研究の進展が、「歴史」をめぐる議論を活性化し、より厚い「歴史」の構築につながることを示してきた。

また、そのなかで研究対象資料と分析方法の幅が格段に広がっていった点も、その大きな成果であった。一方で、「水田中心史観批判」では、「歴史観」や「文化」から個々の「観察事実」に至る、さまざまなレベルの「理論」に対する意識が弱く、また自らのパラダイムや議論の根拠などを内省的に検討し直す姿勢が不十分であったために、視点の多様性の有効性が生かされず、時に複数の学問分野のもたれ合いのなかで、「類型的文化動態論」や「基本パラダイム」のような「歴史観」が形成されることになってしまった。これらが私の考える「水田中心史観批判」の功罪である。

私は、「水田中心史観批判」の特徴である、既存の枠組みに対する批判的姿勢と、「歴史」を多面的・多角的に見る視点は、今後の研究において一層重要になるものと考えている。これに対し、こうした研究方向は、「歴史」の相対化を加速させ、百家争鳴のカオス状態につながってしまうとの危惧をもつ向きもあろう。しかし、私は、そうした混乱は、「歴史」研究の多様化とは別の次元の問題と考えている。

人間の社会は、その発生以来、自らの世界を説明するための観念的な枠組みを作り続けてきたのであり、そのなかであって、自分たちの世界の形成過程を説明する「歴史」的視点は常に大きな役割を占めてきた。社会には、その成員に共有されるべき「歴史」、つまり「正史」の構築へと向かう力が内在しており、それは現代の国民国家をはじめさまざまなレベルの社会も同じである。

そうした「歴史」（「正史」）は、社会関係の維持というある種の「目的」から独立することはできないし、それ故に、その「目的」が多かれ少なかれ「歴史」に反映されることになる。「目的」が「歴史」を偏ったものにしてしまう力は非常に強く、それは過去そして現在も続く「歴史」の政治的利用や教科書検定制度などを一瞥しただけでも納得できるはずである。本稿で論じてきた「類型的文化動態論」の問題は、「日本文化」の多様性を論じようとする目的意識が強く働きすぎた結果と言うこともできるのである。

いかなる社会にも「歴史」を求める力が内在するのであれば、歴史研究の歩みが止まることはない。そうしたなかで、多くの研究者が、批判的・内省的視点のもとでより多くの現象を説明し得る理論の構築を目指しつつ、それぞれ多様な視点からの「歴史」を提示し続けることは、所謂「正史」を構築しようとする側に多様な選択肢を提供することになるのはもちろん、「目的」によって不可避免的に生じてしまう「歴史」の偏りに気づき、それを矯正していくために不可欠なことと考える。そこに現代的な意味における歴史学の役割の一つがあると言ってもいい。

混乱は、視点の多様化の先にあるのではなく、多くの場合、理論の狭隘さから生じると認識することが大切である。

---

#### 引用・参考文献

- 青木 敬 2003『古墳築造の研究—墳丘からみた古墳の地域性—』六一書房  
 あきる野市前原遺跡調査会 2004『水草木・東原』  
 網野善彦 1982『東と西の語る日本の歴史』そしえて  
     1986「日本論の視座」（『日本民俗文化大系 第1巻 風土と文化』小学館 45-108頁）  
     1993「日本列島とその周辺—「日本論」の現在」（『岩波講座日本通史1』岩波書店 3-37頁）  
     2000『「日本」とは何か』日本の歴史00 講談社  
 安藤広道 2002「異説弥生畑作者」（『西相模考古』第11号 西相模考古学研究会 1-56頁）
-

- 
- 2006 「先史時代の種子遺体・土器圧痕の分析をめぐる覚書」(『西相模考古』第15号 西相模考古研究会 111-122頁)
- 2007 「弥生土器を学ぶ」(『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ① 学生社 40-79頁)
- 2008 「水田と畠の日本史」(『歴博フォーラム 生業から見る日本史 新しい歴史学の射程』国立歴史民俗学博物館編 吉川弘文館 158-181頁)
- 2009 「弥生農耕の特質」(『弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生業』同成社 23-38頁)
- 石川日出志 2008 「弥生時代=鉄器時代説はどのようにして生まれたか」(『考古学集刊』第4号 31-52頁)
- 2010 『農耕社会の成立』(シリーズ日本古代史①) 岩波新書 1271
- 伊藤寿和 1995 「古代・中世の「野島」に関する歴史地理学的研究」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』創刊号 1-20頁)
- 2005 「陸の生業—全体像と多様性の実態解明に向けて—」(『列島の古代史2 暮らしと生業』岩波書店 83-124頁)
- 上山春平編 1969 『照葉樹林文化—日本文化の深層—』中公新書
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 1976 『続・照葉樹林文化—東アジア文化の源流—』中公新書
- 遠藤英子 2012 「レプリカ法から見た東海地方縄文弥生移行期の植物利用」(『第19回 考古学研究会東海例会 縄文/弥生移行期の植物利用と農耕関連資料』発表要旨 7-14頁)
- 大阪府立弥生文化博物館 2004 『大和王権と渡来人 3・4世紀の倭人社会』平成16年度秋季特別展図録
- 大塚達朗 1996 「縄文時代(1) 土器—山内型式論の再検討より—」(『考古学雑誌』第82巻第2号 日本考古学会 11-25頁)
- 2011 「日本先史考古学における編年研究の様相」(『南山大学人類学博物館紀要』第29号 1-25頁)
- 大庭重信 2010 「渡来人と麦作」(『待兼山考古学論集II 一大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 413-427頁)
- 大山 柏 1927 『史前研究会小報第1号』神奈川県勝坂遺跡の発掘調査報告
- 1934 「日本石器時代の生業生活」(『改造』第16巻第1号 改造社 69-83頁)
- 岡 正雄 1958 「日本文化の基本構造」(『日本民俗学大系第2巻 日本民俗学の歴史と課題』平凡社 5-21頁)
- 小川直之 1995 『摘田稲作の民俗学的研究』岩田書院
- 乙益重隆 1978 「弥生時代農業の生産力と労働力」(『考古学研究』第25巻第2号 17-28頁)
- 小畑弘己 2003 「植物遺存体からみた古代食物と食文化」(『食生活研究』23 食生活研究会 32-45頁)
- 2011 『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社
- 賀川光夫 1966 「縄文時代の農耕」(『考古学ジャーナル』No.2 ニューサイエンス社 2-5頁)
- 1972 a 『日本における農耕文化の起源』別府大学考古学論叢2
- 1972 b 『農耕の起源 日本文化の源流をさぐる』講談社
- 金田章裕 1985 『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂
- 鬼頭 宏 1983 『日本二千年の人口史—経済学と歴史人口学から探る生活と行動のダイナミズム—』PHP研究所
- 木村茂光 1992 『日本古代・中世畠作史の研究』校倉書房
- 1996 『ハタケと日本人：もう一つの農耕文化』中公新書
- 櫛原功一 1999 「炭化種実から探る食生活—古代～中世を中心に—」(『食の復元—遺跡・遺物から何を讀みとるか』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集2 81-98頁)
- 黒尾和久・高瀬克範 2003 「縄文・弥生時代の雑穀栽培」(『雑穀—畑作農耕論の地平—』青木書店 29-56頁)
- 黒沢 浩 2011 「「遠賀川式」の思想」(『南山大学人類学博物館所蔵考古資料の研究 高蔵遺跡の研究/大須二子山古墳と地域史の研究』南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第4冊 67-83頁)
- 黒田日出男 1984 『日本中世開発史の研究』校倉書房
- 小池勝典 2006 「墳丘構築法から見た越後の前期・中期古墳—南魚沼市飯綱山古墳群を中心として—」(『電子考古学』第2号 1-34頁)
- 甲元眞之 1986 「弥生人の食糧」(『季刊考古学』第14号 雄山閣 14-17頁)
- 1992 「海と山と里の形成」(『考古学ジャーナル』344 ニューサイエンス社 2-9頁)
- 2000 「弥生時代の食糧事情」(『古代史の論点1』小学館 167-182頁)
- 2004 『日本の初期農耕文化と社会』同成社
- 甲元眞之編 2004 『先史・古代東アジア出土の植物遺存体(2)』日本学術振興会平成13～15年度科学研究費補助金
-

研究成果報告書 熊本大学文学部

- 後藤 直 2011 「栽培植物種子からみた弥生時代農耕」(『講座日本の考古学 6 弥生時代 下』青木書店 107-155 頁)
- 小林謙一・坂本 稔・西本豊弘 2009 「第 6 章 カラカミ遺跡出土種子試料の  $^{14}\text{C}$  年代測定」(『沓岐カラカミ遺跡 II —カラカミ遺跡東亞考古学会第 1 地点の発掘調査—』宮本一夫編 平成 20 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 B 145-147 頁)
- 小林行雄 1938 「弥生式文化」(『原始文化』日本文化史大系 1 誠文堂新光社 214-253 頁)
- 米家泰作 2002 『中・近世山村の景観と構造』校倉書房
- 近藤義郎 1962 「弥生文化論」(『岩波講座日本歴史 1 原始および古代 1』岩波書店 139-188 頁)
- 佐々木高明 1971 『稲作以前』NHK ブックス 日本放送出版協会  
1982 『照葉樹林文化の道』NHK ブックス 日本放送出版協会  
1983 「日本農耕文化源流論の視点」(『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会 1-15 頁)  
1986 『縄文文化と日本人』小学館  
1991 『日本史誕生 日本の歴史 1』集英社  
1993 a 『日本文化の基層を探る』NHK ブックス 日本放送出版協会  
1993 b 「畑作文化と稲作文化」(『岩波講座日本通史』第 1 巻 岩波書店 223-263 頁)  
1997 『日本文化の多重構造』小学館  
2003 『南からの日本文化』NHK ブックス 日本放送出版協会  
2009 『日本文化の多様性—稲作以前を再考する』小学館
- 佐原 真 1968 「日本農耕起源論批判—『日本農耕文化の起源』をめぐって—」(『考古学ジャーナル』No.23 ニューサイエンス社 2-11, 20 頁)  
1975 「農業の開始と階級社会の形成」(『岩波講座日本歴史 1 原始および古代 1』岩波書店 111-182 頁)  
1987 『大系日本の歴史 1 日本人の誕生』小学館
- 静岡大学人文学部考古学研究室 2011 『手越向山遺跡の研究—東海東部における弥生時代中期畠状遺構・方形周溝墓の調査—』静岡大学考古学研究報告第 2 冊 六一書房
- 設楽博己 2000 「縄文系弥生文化の構想」(『考古学研究』第 47 巻第 1 号 考古学研究会 88-100 頁)  
2009 「食糧生産の本格化と食糧獲得技術の伝統」(『弥生時代の考古学 5 食糧の獲得と生業』同成社 3-22 頁)
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究室報告第 16 冊
- 杉原荘介 1968 「登呂遺跡水田址の復元」(『案山子』第 2 号 日本考古学協会生産技術研究特別委員会農業部会連絡紙)
- 鈴木公雄 1988 『考古学入門』東京大学出版会
- 高瀬克範 2004 『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房  
2006 『東日本先史時代における栽培植物利用の変遷と特質』(平成 15 年度~平成 17 年度科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書  
2010 「レブリカ・セム法による先史時代の植物利用に関する基礎的研究—青森県域出土土器を対象として—」(『古代学研究所紀要』第 13 号 明治大学古代学研究所 3-22 頁)
- 高宮広土 2008 「第 3 章 カラカミ遺跡(2004・2006 年度調査)出土の植物遺体」(『沓岐カラカミ遺跡 II —カラカミ遺跡東亞考古学会第 2 地点の発掘調査—』宮本一夫編 平成 19 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 B 114-120 頁)  
2009 「第 1 章 カラカミ遺跡(2007 年度調査)出土の植物遺体」(『沓岐カラカミ遺跡 II —カラカミ遺跡東亞考古学会第 1 地点の発掘調査—』宮本一夫編 平成 20 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 B 115-120 頁)
- 高橋 護 1992 「縄文時代の靱痕土器」(『考古学ジャーナル』No.355 ニューサイエンス社 15-17 頁)  
1994 「縄文農耕と稲作」(『東アジアの古代文化』第 81 号 42-51 頁)
- 田崎博之 1986 「弥生時代の食糧 コメ」(『季刊考古学』第 14 号 雄山閣 18-22 頁)
- 玉永光洋 1992 「二 高原と平野の大集落」(『大分県史 先史篇 II』125-190 頁)
- 千葉徳爾 1966 『民俗と地域形成』風間書房
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」(『講座日本歴史 1 原始・古代 1』東京大学出版会 117-158 頁)  
1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

- 
- 坪井洋文 1979 『イモと日本人』 未來社  
1982 『稲を選んだ日本人』 未來社
- 鶴間正昭 1986 「古代の丘陵地開墾について」(『東京都埋蔵文化財センター研究紀要』IV 91-176頁)
- 寺沢 薫 1986 a 「弥生時代の食糧 畑作物」(『季刊考古学』第14号 雄山閣 23-31頁)  
1986 b 「稲作技術と弥生の農業」(『日本の古代4 縄文・弥生の生活』中央公論社 291-350頁)
- 寺沢 薫・寺沢知子 1981 「弥生時代植物質食糧の基礎的研究」(『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第5冊 1-129頁)
- 樋泉岳二 2009 「縄文文化的漁撈活動と弥生文化的漁撈活動」(『弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生産』同成社 186-197頁)
- 東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター 2000 『代継・富士見台・西龍ヶ崎遺跡』(東京都埋蔵文化財センター調査報告第90集)
- 洞口正史 2007 「群馬県埋蔵文化財調査事業団種実調査遺跡集成」(『研究紀要』25 群馬県埋蔵文化財調査事業団 139-154頁)  
2008 「群馬県種実調査遺跡集成」(『研究紀要』26 群馬県埋蔵文化財調査事業団 221-240頁)  
2011 「平安時代主食穀類についての素描—吉岡町万蔵寺廻り遺跡の炭化種実調査から—」(『研究紀要』29 群馬県埋蔵文化財調査事業団 105-124頁)
- 藤間生大 1951 『日本民族の形成—東亜諸民族との連関において—』岩波書店
- 中尾佐助 1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波新書
- 中沢道彦 2009 「縄文農耕論をめぐって—栽培種植物種子の検証を中心に—」(『弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生産』同成社 228-246頁)
- 中沢道彦・丑野 毅・松谷暁子 2002 「山梨県韮崎市中道遺跡出土の大麦圧痕土器について」(『古代』111号 早稲田大学考古学会 63-83頁)
- 中沢道彦・丑野 毅 2010 「レプリカ法による百刈田遺跡出土粉痕土器の観察」(『百刈田遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第184集 附編 1-30頁)
- 中沢道彦・中村 豊・遠部 慎 2012 「レプリカ法による徳島県三谷遺跡出土土器の種実圧痕の研究」(『青藍』第9号 考古フォーラム蔵本 25-37頁)
- 中山誠二 2009 「縄文時代のダイズ属の利用と栽培に関する植物考古学的研究」(『古代文化』第61巻第3号 古代学研究会 40-59頁)
- 中山吉秀 1976 「離れ国分考」(『古代』第61号 早稲田大学考古学会 35-59頁)
- 西田正規 1977 「Voice of Jomon culture 鳥浜貝塚 栽培種子」(『季刊どるめん』No.13 85-89頁)
- 日本考古学協会編 1949 『登呂』毎日新聞社  
1961 『日本農耕文化の生成』東京堂
- 能登 健 1986 「里棲み集落の研究—集落変遷からみた農耕地の拡大過程とその背景—」(『内陸の生活と文化』雄山閣 3-29頁)
- 能登 健・洞口正史・小島敦子 1985 「山棲み集落の出現とその背景—二つの「ヤマ」に関する考古学的分析—」(『信濃』第37巻第4号 275-292頁)
- 野本寛一 1997 「総説 生業の民俗」(『講座日本の民俗学5 生業の民俗』雄山閣 3-18頁)
- 橋本裕行 1998 「食物と調理法」『古墳時代の研究3 生活と祭祀』雄山閣 51-61頁)
- 原田信男 2006 『コメを選んだ日本の歴史』文芸春秋社
- 広瀬和雄 1997 『縄紋から弥生への新歴史像』角川選書
- 藤尾慎一郎 2002 『縄文論争』講談社選書メチエ 256  
2004 「日本の穀物栽培・農耕の開始と農耕社会の成立—さかのぼる穀物栽培と生産経済への転換—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第119集 117-137頁)  
2009 「縄文から弥生へ・弥生前史」(『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』同成社 3-16頁)  
2011 『〈新〉弥生時代 五〇〇年早かった水田稲作』歴史文化ライブラリー 329 吉川弘文館
- 藤尾慎一郎・李 昌熙 2010 「歴博国際研究集会「日韓先史時代の集落研究」開催報告」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第160集 73-188頁)
- 藤本 強 1988 『もう二つの日本文化』UP考古学選書2 東京大学出版会
- 藤森栄一 1970 『縄文農耕』学生社
- 松木武彦 2011 「『世界』史の中の弥生文化—環境・認知・文化伝達—」(『考古学研究』第58巻第3号 考古学研究)
-



- 会 37-50 頁)
- 松島 透 1964 「飯田地方における弥生時代打製石器」(『日本考古学の諸問題』考古学研究会 59-68 頁)
- 松谷暁子 1982 「エゴマ・シソ」(『縄文文化の研究 2』雄山閣 50-62 頁)
- 松山利夫 1986 『山村の文化地理学的研究』古今書院
- 丸山幸彦 1989 「古代から中世にかけての種野山の形成過程」(『徳島県立博物館開設準備調査報告』3 41-49 頁)
- 三浦圭介 1992 「青森県での遺跡調査におけるフローテーション法の導入とその成果について」(『考古学ジャーナル』No.355 ニューサイエンス社 29-31 頁)
- 三沢 章(和島誠一) 1936 「金属文化の輸入と生産経済の発達」(『日本歴史教程』第 1 冊 白陽社(和島誠一 1973 『日本考古学の発達と科学的精神』和島誠一著作集 155-195 頁参照)
- 溝口常俊 2002 『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会
- 宮本一夫 2000 「縄文農耕と縄文社会」(『古代史の論点 1 環境と食糧生産』佐原真・都出比呂志編 小学館、115-138 頁)
- 2005 「園耕と縄文農耕」(『韓・日新石器時代の農耕問題』第 6 回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料(財)慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会 111-130 頁)
- 2009 『農耕の起源を探る イネの来た道』歴史文化ライブラリー 276 吉川弘文館
- 宮本常一 1965 『生業の推移』河出書房新社(1995 『生業の歴史』未来社として再版)
- 1968 「山と人間」(『民族学研究』第 32 巻第 4 号 259-269 頁)
- 1981 『日本文化の形成』そしえて
- 三吉秀充 2012 「松山平野出土の植物遺存体に関する基礎的研究」(『愛媛大学法文学部論集・人文学科編』第 32 集 127-147 頁)
- 森岡秀人 2011 「列島内各地における中期と後期の断絶」(『弥生時代の考古学 3 多様化する弥生文化』同成社 176-193 頁)
- 森本六爾 1933 「日本における農業起源」(『ドルメン』第 1 巻第 8 号 1-4 頁)
- 森本六爾編 1933 『日本原始農業』東京考古学会
- 1934 『日本原始農業新論』東京考古学会
- 安室 知 1997 「複合生業論」(『講座日本の民俗学 5 生業の民俗』雄山閣 249-270 頁)
- 1998 「水田をめぐる民俗学的研究—日本稲作の展開と構造—」慶友社
- 柳田國男 1913・1917 「山人外伝資料(山男山女山丈山姥山童山姫の話)」(『郷土研究』1 巻 1 号・2 号・6 号・7 号、4 巻 11 号(柳田國男 1968 『定本柳田国男集』第 4 巻 筑摩書房 449-472 頁)
- 1917 「山人考」大正六年日本歴史地理学会大会講演手稿(柳田國男 1968 『定本柳田国男集』第 4 巻 筑摩書房 172-186 頁)
- 1935 『郷土生活の研究法』刀江書院
- 柳田國男・安藤広太郎・他 1969 『稲の日本史』筑摩書房
- 山口 徹 2000 『近世畑作村落の研究』白桃書房
- 山崎純男 1983 「西日本の縄文後・晩期の農耕」(『縄文文化の研究 2』雄山閣 267-281 頁)
- 2003 「西日本の縄文後・晩期の農耕再論」(『大阪市学芸員等共同研究 朝鮮半島と日本の相互交流に関する総合学術調査—平成 14 年度成果報告—』大阪市学芸員等共同研究実行委員会、48-69 頁)
- 2005 「西日本縄文農耕論—種子庄痕と縄文農耕の概要—」(『韓・日新石器時代の農耕問題』第 6 回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料(財)慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会、59-68 頁)
- 山田昌久 2005 「縄文・弥生幻想からの覚醒—先史時代研究における狩猟・採集・育成技術の経済構造化論—」(『現代の考古学 2 食糧獲得社会の考古学』朝倉書店 99-123 頁)
- 山内清男 1932 a 「日本遠古之文化 1 縄紋土器文化の真相」(『ドルメン』第 1 巻第 4 号 岡書房 40-43 頁)
- 1932 b 「日本遠古之文化 2 縄紋土器の起源」(『ドルメン』第 1 巻第 5 号 岡書房 85-90 頁)
- 1932 c 「日本遠古之文化 3 縄紋土器の終末」(『ドルメン』第 1 巻第 6 号 岡書房 46-50 頁)
- 1932 d 「日本遠古之文化 3 縄紋土器の終末」(『ドルメン』第 1 巻第 7 号 岡書房 48-53 頁)
- 1932 e 「日本遠古之文化 5 4 縄紋式以後(前)」(『ドルメン』第 1 巻第 8 号 岡書房 60-63 頁)
- 1932 f 「日本遠古之文化 6 4 縄紋式以後(中)」(『ドルメン』第 1 巻第 9 号 岡書房 48-51 頁)
- 1933 「日本遠古之文化 7 4 縄紋式以後(完)」(『ドルメン』第 2 巻第 2 号 岡書房 49-53 頁)
- 1936 「日本考古学の秩序」(『ミネルヴァ』第 1 巻第 4 号 137-146 頁)

- 
- 1964 a 「日本先史時代概説」(『日本原始美術Ⅰ』講談社 135-147頁)  
1964 b 「縄文式土器・総論」(『日本原始美術Ⅰ』講談社 148-158頁)  
1969 「縄紋時代研究の現段階」(『日本と世界の歴史』第1巻 学習研究社 86-97頁)  
横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団 1984 『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No.6 遺跡Ⅰ-Ⅳ 1983年度』  
吉崎昌一 1991 「フゴッペ貝塚から出土した植物遺体とヒエ属種子についての諸問題」(『フゴッペ貝塚』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第72集 535-547頁)  
1992 「古代雑穀の検出」(『考古学ジャーナル』No.355 ニューサイエンス社 2-14頁)  
1995 「日本における栽培植物の出現」(『季刊考古学』第50号 雄山閣 18-24頁)  
吉崎昌一・椿坂恭代 1992 「青森県富ノ沢(2)遺跡出土の縄文時代中期の炭化植物種子」(『富ノ沢(2)遺跡Ⅳ』青森県教育委員会 1097-1110頁)  
和島誠一・金井塚良一 1966 「集落と共同体」(『日本の考古学Ⅴ 古墳時代下』河出書房 158-187頁)  
D'andrea, A. C. 1995. Later Jomon subsistence in Northern Japan: New evidence from paleoethnobotanical studies. *Asian perspectives* Vol.34, No.2, University of Hawai'i Press, pp.195-227

(慶應義塾大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年1月25日審査終了)

---

## Critical Reconsideration of the Criticism on the Historical Perspective of Japanese History Centered on the Rice Cultivation Culture

ANDO Hiromichi

In the last quarter century, the critical view on the historical perspective centered on the rice cultivation culture was one of trends in the study of Japanese history. Starting when some researchers of cultural anthropology and Japanese folklore proposed questions, the trend spread out to the Japanese historical document study and archaeology. This was a movement to criticize the historical and cultural interpretation centered on wet rice farming and work toward the establishment of a multifaceted history containing viewpoints of other subsistence such as dry field farming. Whereas such studies provided various arguing points, they exhibited a strong tendency to regard the Japanese culture as a complex of multiple cultures and try to understand the establishment of the value system centered on rice cultivation from the viewpoint of connections with the state authority after the Ritsuryo period. This trend was also profoundly related with findings of archaeology on the Jomon and Yayoi cultures.

Described by the above studies, the history of the confrontation and composition of multiple cultures was confusedly established on inadequate concepts of culture. Moreover, research results about the farming of the Jomon and Yayoi cultures were not always based on reliable materials though they should have played a role as a basis for those studies. The proper arrangement of concepts of culture and thorough criticisms over the farming-related materials revealed the necessity of radical reconstruction of the history established by the critical view on the historical perspective centered on the rice cultivation culture.

On the other hand, rigorous critical stances and wide variety of viewpoints associated with this critical view have diversified research materials and analysis methods and have shown possibility to enable researchers to establish thick and multifaceted histories. But because of a lack of discussion about the theories related with from concepts of culture to each observed facts, and partially because their critical attitude toward the historical perspective centered on the rice cultivation culture was excessively strong, researchers tended not to make fully critical or reflective reviews of their own studies. As a result that they were not able to make good use of the diversity of viewpoints and multiple disciplines were depending on each other, they have established problematic histories.

Based on the above-mentioned merits and demerits of the critical view on the rice cultivation-

---

---

centered perspective, researchers should proceed with historical studies which involve thorough mutual and self-reflection and work together with theory construction from a broad perspective to interpret a wider range of phenomena.

Key words: Historical perspective centered on the rice cultivation culture, Jomon culture, Yayoi culture, Critical attitude, Theory